



公益社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング2019(通算33回目)

「正解がない問いと共に生きる時代の人づくり」

報告書

日 時：2019年11月15日(金)～17日(日)

会 場：公益財団法人キープ協会清泉寮

山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、ESD 活動支援センター

関東地方 ESD 活動支援センター、

NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議

一般社団法人日本環境教育学会

協 賛：株式会社サンエー印刷

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団

損保ジャパン日本興亜保険サービス

J-POWER (電源開発株式会社)

日能研

プレマ株式会社

株式会社みくに出版

参加者：120名

目 次

開催趣意	1
スケジュール	2
開会式	5
全体会	6
全体会 1 「SDGs に捉われすぎていませんか？」	6
全体会 2 「Learn (主体的な学び) と Unlearn (学びほぐし)」	11
全体会 3	18
参加者企画ワークショップ	19
90分ワークショップ・①	21
150分ワークショップ	26
90分ワークショップ・②	35
早朝ワークショップ (60分)	40
当日募集ワークショップ (90分)	41
さんかくんプレゼンタイム	44
オプション	45
各コーナー	45
参加者データ	46
スタッフ・ボランティア	47
清里ミーティングこれまでの実績	48

開催趣意

清里ミーティングは、1987年9月、自然体験・野外教育・環境教育に関心を寄せる人たちが山梨県清里に集まり「第1回清里フォーラム」を開いたことからスタートした。毎年、自然学校等の環境団体、企業、行政、教育機関等から約200名の関係者が参加し、環境教育に関心のある人たちの交流の場として30年続いてきた。環境分野以外の多様なステークホルダーとの協働も目指し、広く「持続可能な社会に貢献するひとづくりに携わる人たちの学び合いの場」として、多様性とパートナーシップによって環境問題・社会課題解決のヒントを探る。2018年には、「平成30年度持続可能な社会づくり活動表彰」（主催：公益社団法人環境生活文化機構）にて環境大臣賞を受賞した

2019年は33回目の開催として、11月15日（金）～17日（日）の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会 清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に実施した。

■ 清里ミーティングの目的

1. 最先端の情報や手法を学ぶ場を提供し、参加者の活動をエンパワメントする。
2. 参加者同士のネットワークを構築し、協働を促進する。
3. 1、2をもって持続可能な社会に向けて行動する人を増やす。

2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）に向け、環境教育だけではなく、他分野とのパートナーシップがより重要となってくる。清里ミーティングも環境教育以外のより広い分野からの参加者を募り、新しいコラボレーションが生まれることをねらっている。お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的としている。

■ 清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者が“主役”であること。

どのようなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体で作り上げていくという性格を持つ。主催側で企画したプログラムのほかに、参加者の中からプログラムを企画・実施する方を募って開催している。

■ 今年の特徴

2015年に国連でSDGsが採択されてから、多様なステークホルダーが協働した様々なSDGsアクションが生まれている。しかし同時に、人々が17のゴールに対応することに躍起になって、世界の在り方を変えるという本来の目的を見失っていないかという懸念も膨らんできた。現代は“VUCAの時代”（※）と言われる。刻々と変化する世界の中で、これが正解と単純に決められない問題が山積みとなっている。そんな時代を生きていくのに必要なチカラを育むために、環境教育が積み重ねてきた知見が少しずつ注目され始めている。

SDGsが目指す2030年になったとき、私たちはその先に何を描くのか。JEEFも含めた持続可能な社会づくりに向けて活動する人たちにとって、2030年はゴールではなく通過点。その先にある持続可能な社会への道筋をどう描き、そのためにどのような人材を育てたいのか。自分自身の活動により多くの人を巻き込んでいくためのキーワードを探り、これまでの蓄積とこの先の未来がどうつながるのかをみんなで考える回とした。

※Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字

【 1 日 目 】 11 月 15 日 (金)

時間	内容
11:30～	受付開始
11:00～11:30	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
11:40～12:00	JEEF 理事長・川嶋直による「SDGs ミニ教室」(自由参加)
12:00～13:00	新館ホール入場
13:00～13:30	開会式
13:30～15:30	<p>全体会 1 「SDGs に捉われすぎていませんか？」</p> <p>SDGs は「良い社会をつくろう」と人類が目指す先を分かりやすく示す指標となりました。しかし一方で、手応えと共に違和感を感じている人も多いのではないのでしょうか。ポーツと SDGs についていこうとしているだけでは、チョクさんに叱られちゃいますよ！？様々なサステナビリティ・アクションにふれてきたゲストを迎え、既存の発想に捉われすぎないアクションの可能性について学び合います。</p> <p>【ゲストスピーカー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中村 絵乃さん(認定 NPO 法人 開発教育協会 (DEAR) 事務局長) ・竹内 慎一さん(NHK エデュケーショナル) <p style="text-align: center;">* ファシリテーター: 川嶋 直 (公益社団法人日本環境教育フォーラム)</p>
15:30～17:00	移動・チェックイン ワークショップ準備・各会場へ移動
17:00～18:30	<p>90 分ワークショップ・1</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 社員を全員ファシリテーターに ② インタープリテーションをより効果的にする指標作成プロジェクト ③ 地球温暖化を逆転する 100 の方策ドローダウン紹介 ④ 全く新しいアイデアで地球を救う本気スーパー脳嵐 ⑤ 「静」のプログラムの可能性
18:30～20:30	夕食 ※ フォーラムショップ OPEN
20:30～23:00	<p>情報交換会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Bar 開店 ・みどりさんの英会話コーナー開設 ・鴨コーナー ・パタゴニア試飲 ・川嶋さんの KP 屋台 ・コンシェルジュデスク開設 ・リクルートコーナー開設 ・参加者オプション企画(星空観察会、渡り鳥の声を聴く会) <p>※ 翌日の早朝ワークショップ参加希望サインナップ(21:30 まで)</p>

【 2 日目 】 11 月 16 日(土)

時間	内容
7:00～8:00	早朝ワークショップ （自由参加）
	1 美しい玉虫の甲羅でアクセサリーを作ってみましょう。
	2 渡り鳥に出会い、季節や自然を感じよう！
	3 清里朝散歩♪
	4 ヨーガと瞑想
7:30～8:30	朝食
9:00～11:30	150分ワークショップ ※ワークショップ⑦は実施者キャンセル
	⑥ スマホから考える世界・わたし・SDGs
	⑧ カードゲーム“新”エネルギー大臣になろう！
	⑨ わたしたちの地域、みんなでどうする？ ～各地の事例から学び合おう！～
	⑩ 野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議
	⑪ 持続可能に海の資源を守るための取り組みを考える
	⑫ 「セルフケア」という身体から変える持続可能な社会
	⑬ 環境教育×中小企業！ ～パートナーシップで持続可能な事業をめざす～
	⑭ エコロジカル・シンキング カードで発想しよう！
	⑮ 自然観察の基本、環境教育の基礎をおさえよう
11:30～12:45	休憩・昼食・移動
12:45～14:45	全体会 2「Learn(主体的な学び)とUnlearn(学びほぐし)」 これからの人づくりに関してキーワードとなる Learn(主体的な学び)とUnlearn(学びほぐし)。自身の価値観を見直し続けることの重要性が提起されています。各分野で人材育成に尽力されているゲストと共に、私たちが「育てたい人材像」を語り合いながら、自分が学んできたこと、実践してきたことを新しい視点で捉え直し(学びほぐし)ます。 【ゲストスピーカー】 ・佐藤 真久さん(東京都市大学 教授) ・高木 幹夫さん(日能研 代表) ・齊藤 雅代さん(えんなか合同株式会社 代表) ・西村 和代さん (一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン共同代表) *ファシリテーター: 鴨川 光 (公益社団法人日本環境教育フォーラム)
14:45～15:30	休憩・移動
15:30～17:00	90分ワークショップ・2
	⑯ 見ることに頼りすぎているかもしれない私たちへ。
	⑰ 古今東西！環境教育ミーティング！
	⑱ ライブ&ダイアログ: 自然の摂理を歌おう！
	⑲ ゲノム編集食品について問い合わせ
⑳ 林業×チームビルディングの可能性は？	
17:00～17:30	休憩・移動

17:30～18:30	さんかくんプレゼンタイム
18:30～20:30	夕食
19:00	★翌日の「当日募集ワークショップ」実施者エントリーの締め切り
20:30～23:00	<p>情報交換会</p> <p>★21:30 翌日の「当日募集ワークショップ」参加者エントリーの締め切り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暗闇の中でアイスを味わう体験会 ・Bar 開店 ・みどりさんの英会話コーナー開設 ・鴨コーナー ・パタゴニア試飲 ・川嶋さんの KP 屋台 ・コンシェルジュデスク開設 ・リクルートコーナー開設

【 3 日 目 】 11 月 17 日 (日)

時間	内容
7:30～8:30	朝食
8:30～9:00	<p>チェックアウト</p> <p>★荷物は新館玄関またはハケ岳自然ふれあいセンターへ</p>
9:00～10:30	<p>当日募集ワークショップ</p> <p>★2 日目 19:00 まで実施者エントリー募集！</p>
10:30～11:00	移動
11:00～12:00	<p>全体会3</p> <p>3 日間をふりかえる時間。</p>
12:00～12:30	閉会式
12:30～13:45	さよならパーティー(立食)
14:00～15:00	<p>解散・オプション企画</p> <p>会場であるキープ協会の施設を紹介するツアーを行います。</p>

開会式

※敬称略

開会式

司 会	：	公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）	垂水 恵美子
主催者挨拶	：	公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事長	川嶋 直
挨拶	：	環境省 自然環境局国立公園課国立公園利用推進室 室長補佐	尾崎 絵美



また、11月にJEEFの事務局長が交代したことに伴い、加藤新事務局長から参加者の皆様へご挨拶を行った。



全体会

※敬称略

全体会 1 「SDGs に捉われすぎていませんか？」

ファシリテーター：

公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）

川嶋 直

スピーカー：

認定 NPO 法人開発教育協会（DEAR）

中村 絵乃

NHK エデュケーショナル

竹内 慎一



SDGsは「良い社会をつくろう」と人類が目指す先を分かりやすく示す指標となった。しかし一方で、手応えと共に違和感のある人も多いのでは。様々なサステナビリティ・アクションにふれてきたゲストを迎え、既存の発想に捉われすぎないアクションの可能性について学び合う時間とした。



環境教育と開発教育というように言葉は違いますが、持続可能な社会をつくるという意味では絶対に必要な 2 つです。今回呼んでいただいたのもその理由であると思いますし、ESD (持続可能な開発のための教育) と SDGs では“SD (Sustainable Development=持続可能な開発) が共通します。SDGs は大きな危機感を持って、国連で加盟国全員が一致して設定されました。

DEAR は 1982 年設立の「開発教育」と言われる教育活動の普及・推進によって「知り・考え・行動する」地球市民を育むことを目指す団体です。南北問題のチャリティ活動が設立のきっかけでした。貿易や産業の構造の問題が貧困の原因となっていました。援助や国際協力は支援のほんの一部でしかありません。環境破壊も起こりました。たくさんの森林が伐採されて、資源を使われ、政治にも介入されています。そういった問題の原因を先進国が作っているのだとしたら、私たちは何を変えていったらいいのでしょうか。DEAR は市民の行動を変えるための教育活動に大きく変化していきました。SDGs のキーワードは 2 つあります。「誰一人取り残さない」と「変革」。従来の開発では持続不可能です。社会全体を変えなければ変革は起こらないという大きなメッセージです。私たち DEAR は教材を使って、このような問題を考えてきました。

教材を使う理由は、現場 (途上国) が近くになく、「大変な問題に関わるのは難しい」と思われがちだからです。教材を使うことが目的ではなく、社会の問題に関心を持ち、参加する機会を作って欲しいと思い、参加型学習のものにしています。なぜそのテーマを選んだのか、なぜ参加型学習なのか、教師だけでなく生徒も理解することが必要です。行動をつくるまでのプロセスが入っています。「参加する」とは？ 今回のようなフォーラムに参加すること、発表すること、自分から声をかけて友だちを誘うことも参加になります。重要なのは、自分から準備し、提案し、最後のふりかえりをすると、大きな参加になるということです。学校の授業も同じで、先生が考える問いやプログラムを生徒が考えてもいいのではないのでしょうか。そうすれば授業はもっと参加型になると思います。大事なのは、決定のプロセスに参加することです。学校、組織、地域でも誰かが決めたところに参加することが多いですね。ぜひ皆さんは、自分の関心のあるところに意見を出してください。私たちが参加型学習をするのは、政策などにも関心を持って意見を言える人を作りたいからです。言わないと変わりません。

では、持続可能な社会とはどんなもののでしょうか。日本政府は「持続可能な成長」と言っています。途上国の人々や子どもたちにとって、“経済的な成長”を考えることが本当に持続可能なのでしょうか。誰にとって持続可能なのか、考えなければいけないキーワードです。DEAR の SDGs 基本方針では、経済成長に価値を置いてきたことや、意思決定が一部の人によって行われてきたことによる問題提起など、変革に呼び出しているの提示をしています。「持続可能な社会」の指標でよく使われるのは、自然環境、経済、社会文化、意思決定です。たとえば DEAR の教材『スマホから考える世界・わたし・SDGs』では、真ん中にスマートフォンを置いたときに、環境的影響、レアメタルが地域の生活に与える影響、労働者への影響、廃棄物の量とその影響、儲けを得るのは誰なのか、工場の経営、産業、生産者と消費者、社会的な環境や文化の破壊などなど…そんなところをポイントに持続可能な社会を見ていくこと、としています。

何のための、誰のための教育なのか、今の教育はこのままでいいのか、システムはどうやって変えていくのか。今までの実践や活動をふりかえることも大切だと思います。持続不可能な社会が、このままいくと持続可能な社会になるのでしょうか。でも持続不可能な社会にも、そうなった理由があります。原因を考えて対応すると、持続可能な社会はまったく違うものになるかもしれません。私たちが変わって行動しなくてはならない。でもそのためには、システムを変えなければいけないし、皆はそれに気づかなくてはなりません。SDGs は“大きな問い”だと思います。SD の在り方を考えることで、私たちが変わっていくのだと思っています。



NHK エデュケーショナルで教育番組の制作をしています。番組を20年ほど前から教材として無料で配信したり、短い動画にして学校などで使ってもらえるような設計やプログラミングもしています。SDGs がらみとしては、3年程前から JICA の途上国の課題解決型ビジネス (SDGs ビジネス) と関わっています。ひとつはインドネシアの教育の質向上 (「先生が教える」から「みんなで学ぶ」へ) を目指したワークショップなどの調整。PISA (生徒の学習到達度調査) でも、インドネシアの科学教育はかなり厳しいです。何が厳しいかという、とても受け身だからです。そこでこういった動画を使って少し意欲が向上しました。「答えがない」というマイナスのイメージがあるかもしれませんが、実は学びや教育にとっては、自分事に捉えることができていることではないかと思っています。

『考えるカラス』という番組を制作しました。たとえば蒼井優さんが実験するコーナー。長さの違うロウソクを同じガラスの筒で囲った場合、ロウソクはどう消えるのでしょうか。長いものが消える、短いものが消える、同時に消える…皆さんはどう思いますか? 「知識が思考の邪魔をする」という言い方があります。今回は長いものが先に消えました。短い方が先に消えると予想する人は多いです。「二酸化炭素が重い」という知識。だから短い方が先に消えるだろうと、それ以上考えることをやめてしまいます。長い方が先に消える理由は、二酸化炭素があたためられて上へ行って、結果、長い方が先に消えるのではと考えられています。でも、番組の中でも HP でもその答えは出しませんでした。もしかしたら皆さんの実験によって、新しい仮説やアイデアが生まれるかもしれないからです。実際、募集をかけたところいくつか集まりました。意外とこういうことでやる気になってくれるんだな、と思いました。

なぜこの番組を作ろうとしたか、当時の番組に違和感があったからです。教育ということに上から目線を感じていました。学校は本来教育の場ではなく学びの場、主体は子どもであるはずですが、でも子どもに何を学ぶかの選択権はありません。PISA のような知識レベルもいいですが、なぜ学ぶのか、学びたい意欲を大切にしたいと思いました。そんな時、あるシンポジウムで『「ためしてガッテン』という番組はけしからん』と指摘されました。最後にガッテンしてしまうから、と。科学者や研究者にとっては当たり前のことですが、科学は絶対ではありません。しかし一般の人は絶対ととらえてしまいます。“教える”ことは親切の半面、傲慢だったのではと思いました。先ほどのロウソクのように「知識が思考の邪魔をする」こともあります。『考えるカラス』では、たくさんの反響をもらいました。一番は「モヤモヤする」という感想。面白かったのは、「夫婦の会話が増えた」。ああでもない、こうでもない話し合ったそうです。

アクティブ・ラーニングの話もありますが、NHK ニュースでも 2015 年は“授業方法”、2016 年に“学習方法”と言い方を変えました。子どもが主体なので当然ですが。テンダーさんの言葉で印象に残っているのは、「教え (教条) で人は変わらない」という言葉です。そもそも今の状況を招いてしまった大人が、上から目線で“教える”のは失礼だと。本当にそうだと思います。山藤旅聞さんも、「大人も答えを知らないものに子どもたちは燃える」と言っています。アメリカの映画『Most Likely to Succeed』では、教科や時間割、チャイムがなく、プロジェクトがあってそれに取り組むかたちの学校のドキュメンタリーです。

SDGs は目標であり、通過点です。問題集やツールのようなものだと思います。“答えのない問い”だらけで、教えるのではなく“共に学ぶ”ための格好の問題集かもしれません。

中村氏、竹内氏からそれぞれ事例を紹介いただいた後、JEEF 専務理事・阿部治氏を交え、会場との質疑応答や登壇者同士のディスカッションを行った。

竹内 SDGs 教育の場を作りたい、と言うと反応が微妙だったりして、なかなか広まらなかつたりします。「正しすぎて胡散臭い」と言われたこともあります。実際にはどのように現場で扱っているのかなど。

中村 批判的な視点は常に持つていようと思いつながら SDGs のことも見えています。トップダウンで作られた MDGs と比べて、SDGs はたくさんの時間や人を使って作られました。17 に入っていないものも世にはたくさんあります。誰一人取り残さない方法をたくさんの人が考えました。格差が入ったのはとても大きいです。理想とも思われますが、持続可能な社会がどんなものか一人ひとりが考え、全部の地域がやっつていい。みんなが共通認識を持つために利用すればいいのだと思います。

川嶋 中村さんからの質問。「考えることが面白い、考え続けることはチャンス、チャレンジ」とは？

中村 さっきの『考えるカラス』がとても面白かつたです。ああやっつて考えることはすごく楽しいんだなど。ただ、今の学校は考える余地がなかつたりします。考え続けることを難しいことだと思つています。だけどそこにチャンスがあるのではと、考えることを諦めてはいけな、そこに変革のチャンスがあると、竹内さんの話を聞いて改めて思つました。

竹内 思春期とか、大学出た頃とか、考えることがつらかつた時代もありました。でもそれではだめだと思つ直して今になりますが、最低限、自分のことは自分で決めたい、そのためには考える続けるしかないと思つています。一方で、考えない方が楽だという気持ちも分かりますね。

川嶋 阿部専務理事からの質問。「SDGs の自分事化 ローカライズ」とは？

阿部 おふたりのお話、とても共感しました。SDGs は本当に画期的だと思つます。あれが達成されたら世界が変わります。それを決めたことが凄いです。一方で、中村さんが「プロセスが大事」とありました。誰が考えるのか、誰が当事者なのかということです。私たち一人ひとりが“取り残されな”ようにならなければいけません。竹内さんがおっしゃった「自分事化」のキーワード、トップダウンをどうボトムアップにしていくか。環境、社会、経済の両立のために政治が必要だと思つます。

竹内 偉い人、上の人には世の中のことを分かつつしている、と思つがちですが、大人や先生にもまだ分かつないことがあつて、一緒に考えることがすごく嬉しいと思つます。学び方、方法を教えるのがいいです。答えは変わるのです。

川嶋 学校は学び方、考えることの練習をする場ということですね。もう一つ阿部さんからの質問で、2030 年はどんな通過点になると思つますか？

中村 あと 10 年でどう変わるんでしょうね。会場の皆さんの団体や企業、組織で「変わったな」と思つところはありますか？

会場 かつこいい、面白そう、という目線から SDGs へのアプローチが小学校でも生まれています。私の勤めるアフタースクールでは、中学・高校のお兄さんお姉さんがオーガニックコットンを広めるなどの活動や討論うしているのを小学生たちが見て、私たちも参加したい、と声が上がりました。子どもたちの「やりたい」に大人はどんなサポートができるか、考えるように変わり始めています。

会場 私の会社ではかなり SDGs に力を入れていて、社会課題解決や自分たちに持つ何かを使って社会に還元したい、という方が増えています。SDGs の研修ではえんたくんを使いました。広報の人たちが SDGs をやりたいけとどうしたらいいか話をしていて、私の個人的な活動との協働が生まれようとしています。



中村 小さな変化でも大きな変化でも、一人ひとりに問いかけられています。私はとても危機感を持っていますし、皆さんにも持ってほしいです。一方で、子どもたちに責任はないので教育は楽しくしたいと思っています。

阿部 SDGsはチャンスだと思っています。次の世代が未来を創るチャンスです。

川嶋 会場からも意見や質問を受付けたいと思います。

会場 共感はしてもらえつつも、本来の意味のパートナーシップは成り立っていない気がします。学校と企業で、「いいね」とは言っても、では実際に何か動くかということ、そうならないことが多いので。

中村 NGO/NPOでは、協働しているところも多いと思っています。

川嶋 たとえば新渡戸文化学園がプレゼンセッションで「未来をつくる超・文化祭」を発表します。これは高校生たちが自主的に発案・提案して、企業がそれに応える活動です。

会場 大学など本格的にやるところもありますが、もっと社会につながってほしいと思っています。

会場 私の仕事は学校の郷土学習の支援です。授業と違って先生にとってとてもハードルが高いと相談を受けます。テーマをつくる時に子どもたちの意見を聞いて、子どもたちのやりたいことを設定するのがいいと思いますが、同時に難しいだろうとも考えています。竹内さんの「疑問をモヤモヤしたままにする」、答えのない問いをどのように渡すといいのでしょうか。

竹内 子どもの発達段階は分かりませんが、自分で調べることはできます。分からないままにする気持ち悪さに敏感なのは、先生です。子どもたちから疑問を引き出すのは、新渡戸文化学園が得意かなと思います。



全体会 2「Learn（主体的な学び）と Unlearn（学びほぐし）」

ファシリテーター：

公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）

鴨川 光

スピーカー：

東京都市大学

佐藤 真久

えんなか合同株式会社

齊藤 雅代

株式会社日能研／JEEF 理事

高木 幹夫

一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン

西村 和代



これからの人づくりにおいてキーワードとなる Learn（主体的な学び）と Unlearn（学びほぐし）。自身の価値観を見直し続けることの重要性が提起されている。各分野で人材育成に尽力されているゲストと共に、私たちが「育てたい人材像」を語り合いながら、自分が学んできたこと、実践してきたことを新しい視点で捉え直し（学びほぐし）た。

導入：東京都市大学 佐藤 真久

地球には様々な問題がありますが、今までの問題とずいぶん今変わってきました。気候変動の問題から、グローバルな金融、ガバナンス等々あるわけですが、ここでいくつかの例を挙げていきましょう。

例えば、肥満の問題。安いパンケーキを食べることによってエネルギー過多になり、日本でも問題とされています。片方で途上国の都市化が進み、エネルギーそしていろんな消費意欲の高い方がそういったものを買うことによってどんどん肥満が増加する、そんな状況があります。

高齢化の問題は、我々は日本の少子高齢化という言葉の中で捉えがちですが、実はヨーロッパ（特にスカンジナビアの国々）、ベトナム、韓国、タイの問題でもあります。従来の途上国と先進国の文脈を越えて、このグローバルで複雑な問題によく直面しているのが、今日の状況であるわけです。



5つの時代背景

1 点目が大加速化の時代です。いろいろな悪循環がまた悪循環を生み出すことによって、さらに悪くなっていく。そういう状況が進んでいます。たとえば人口の増加。世界の人口は 76 億人です。これが 2050 年、たった 30 年後には 100 億人近くに達成すると言われていています。それだけの人々が都市に集中することで、水の利用、ペットボトル利用、ゴミ、大気、いろいろな問題が連動しながらこれらの悪循環をもたらす「大加速化の時代」がやってきます。

2 点目は「外部のないグローバル化の時代」。1980 年代後半、東西の冷戦が終戦し、世界が一つになりました。それまでは外部＝自分とは関係ない世界がありました。今日、私たちが食べる幕の内弁当やお寿司、使っている携帯電話など、世界と日本のつながりを皆さんはもう知っています。携帯電話ならモリブデン、カンタイ、リチウム、いろいろなものが世界からやってきました。まさに“外部がないグローバル化”。いろいろなものが繋がっているからこそ、私たちによる日々の消費行動そのものが、世界へダイレクトに影響を及ぼすものになってしまいました。

3 点目は「地球惑星の時代」。2050 年に 100 億人の時代を迎えます。地球が 100 億人を達することで限界値に來ることが報告されています。あと 30 年で限界がきてしまう状況の中で、いろんな問題が出てきています。人と人、そして人と自然といった文明のなかで、一つの地球の中でこの関係を保ちながら一緒に生活していく、そんな時代が求められています。

4 点目は「混成文化の時代」。テニスの大坂なおみ選手、今年日本でワールドカップがあるラグビーの選手のように、様々なアイデンティティ、属性を持った方々が多層的な市民性をもって社会の中で生きています。従来の日本人らしさ、日本ならではの文脈を越え、新しい文化の混成性、文化のハイブリットという捉え方が非常に重要です。

5 点目は「VUCA（変動・不確実・複雑・曖昧）の時代」。なかなか先行きがわからない、予期せぬことが起きてしまう時代です。既存の経験に基づく対応の限界、マニュアルが通用しないということです。どのように社会との連動性の中で状況的に学ぶか、これが非常に重要になってきます。日本でも人口の変化、少子高齢化、そして大都市化といった問題が出ています。AI、IoT（Internet of Things＝モノのインターネット化）、そして環境が変化しながら、時空の変化、国外と国際都市の変動といった中で、我々を取り巻く日本社会も大きく変動を遂げているのが今日です。

ありたい社会の追求とありうる社会への対応

SDGsには、大きく2つの特徴があります。1点目は民主主義の結果だと言われていること。多くの人達がアイデアを出し合うことによって、環境、社会、経済など様々な視点がここに集約されたと言われています。一方で、矛盾の産物とも言われていることが2点目の特徴です。経済が成長することによって森そして海が破壊されていく、トレードオフの関係。SDGsのメッセージは17の目標それぞれを語るのではなく、どのようにこの17の問題を同時的に解決していくかです。17の目標にタグ付けしている場合ではないのです。国連は「SDGsはすべて繋がっている」と言っています。我々が勝手に分けてタグ付けしているこの発想が、全くずれているということをお聞き願います。

SDGsの前身であるMDGs（ミレニアム開発目標）では、妊産婦の健康、女性の自立、乳児死亡率の低下等、開発アジェンダでありながら、途上国に対して先進国が何をやるかという会議がされていました。しかし、SDGsは途上国も先進国も、多くの国、そして地域がみんなで一緒にやろうという普遍性があります。MDGsができた2000年は、貧困、HIV、乱獲問題等がありましたが、今日は気候変動の問題、生物多様性の側面、自然災害、高齢化等々の課題になっています。たかが15年されど15年、直面する社会課題がこれだけ変わっています。我々は先進国と途上国が手をたずさえながら、環境と開発の問題に対して、一緒に関わっていく時代になりました。

ここでいくつかの発想の動きをとらえていきましょう。MDGsの時代（2001～2015年）は、ありたい社会について追及してきました。国連の要求ではこれを、**The World We Want** といいます。今年の夏の台風のように、人類は初めての経験をしています。ありたい社会を考えつつ、ありうる社会にも対応していかななくてはなりません。持続可能性の構築を目指しながら、片方では社会の変化に対応していかなければならない、厳しい時代がやってきました。戦後、経済開発、社会開発、そして人間開発といったように「世の中をよくしよう」とする取り組みがありました。日本ではたとえば高速道路や新幹線をつくり、教育の制度をつくり、福祉の仕組みをつくり、そのなかで人へのアプローチ（人づくり）が重要とされました。2015年に出たパリ協定、SDGsという2つのメッセージは、従来の課題を一つ一つ解決するのではなく、芋虫がさなぎになり、蝶になるように、ダイナミックな変容(Transform)を求めています。国連の文書に記載されている初めのタイトルは「Transforming Our World」。私たちが社会を変えよう。個人の変容、社会の変容が求められています。

社会を変えようという潮流の中で、社会背景がこれだけ変わり、ありたい社会だけではなくありうる社会にも対応していかなければならない。これがVUCAの社会と言われています。そして、地球惑星的世界観、社会包摂的世界観（No One Left Behind）、そして変容の世界観に対応していかなければなりません。今までは、問題を問題として解決してきました。いまは複雑な問題への対応が求められています。問題と問題を掛け合わせることで同時に解決することが求められています。今までの先見的な発想を越えて、どのようにいろいろなものを関連付けながら、同時に解決していくか。そしてそれを、共有された責任として、先進国、途上国、都市と農村。世代間を超えて一緒にやっていくということが言われているわけです。

たとえばおとぎ話で、勇者が村人たちを助けることができたのは何故でしょうか？勇者は、その鬼を退治すれば村が豊かになるという答えがわかっていたからです。鬼退治をすれば村が豊かになる。だから鬼退治をする。しかし現在は、誰が鬼だかわからない状況です。気候変動の問題、消費の選択、公共政策・調達。勇者を見つける時代でもなくなってきました。もしかしたら勇者自身が、実は鬼になっているのかもしれない。そんな時代になっています。

鴨川 「木が減ってきたら木を植えよう」とか、「貧困だから給食費を無償にしよう」といった一対一の解決策ではなく、その本質の問題が何かということですね。それを見つけるために試行錯誤する学び方の転換が求められているというお話。正解がない問いとはどんな価値のあるものなのか、考える必要があるかもしれません。

パネルディスカッション： えんなか合同株式会社 齊藤 雅代
一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン 西村 和代
株式会社日能研/JEEF 理事 高木 幹夫

佐藤氏から 20 分ほど、SDGs の俯瞰的背景や現状をふまえた本質について解説いただいた後、齊藤氏、高木氏、西村氏に登壇頂き、各ゲストの持つ実践事例をもとにパネルディスカッションを行った。合間で参加者どうしが「正解のない問いとは自分にとって何か」「矛盾や葛藤をはらんでいる身近なものはあるか」等のテーマを話し合う PKT も設けられた。



株式会社日能研/JEEF 理事 高木 幹夫

システムというものは、理解が難しいもの。佐藤さんが最後に話していた「SDGs は個別ではなくつながっている、全体としてのこと」を聞いて、焼き鳥をイメージしました。17 の目標が焼き鳥、それを貫いている串が「私」。そんなふうに SDGs と付き合うことができたなら何か生まれるかなと思いながら聞いていました。



私は東京生まれ、東京育ち。石川県に移住して、能登と東京で生活しています。大学で海洋生物を学び、メディアやITの仕事を通して社会問題、環境問題の映像をとりながら、東日本大震災をきっかけに地域の生きる力、生活を営む力などに注目しました。能登半島は、世界農業遺産に認定された地域です。ポイントは人の営み（農業、漁業など）が続かないとすぐに廃れてしまうものであること。海が綺麗でなければ漁業が成り立たない伝統漁業や千枚田という棚田など、海と山の間に人の生活がある、それが能登半島です。



私はそこで、「ノトリトリート」というツアーを組んでいます。都心の方が日帰りに来て、自然を感じてもらっています。ラフティング、釣りいかだなど。根底にあるのは、若い世代に海へ親しんでもらいたいという想いです。大学と町、行政と大学の連携を促す事業を行っています。2015年から大学と提携し、大妻女子大学と町が協定を結びました。当初はリサーチやインタビューを行って学生が知識を得る学びでしたが、協定をきっかけに教育委員会や海の体験施設などとも連携することが可能になりました。それによって学生たちが発信側になりました。地域の子どもたちと一緒にポストカードを作ったり、公開講座や文化祭で発表するという一連のプロセスを1年かけて行い、今年で4年目です。

里山・里海の本質的な考えは、やはりそこに住む人だと思えます。地域とのかかわりあいを通じて、彼らが今も脈々と受け継いでいける環境があるから自然が守られていることを忘れてはいけなかったと感じました。先ほど佐藤先生が、個であってもそれはコミュニティであったり、組織であったり、政策だったり、いろいろな中で動くことが今の時代だとお話しされていました。その根底にある“個人”はどうあるべきか。私の一つの答えは、地域の人の暮らし方、暮らしぶり、そこを理解して初めて、関係性がつくれるのだということです。基本的なことですが、お互いに認め合うことです。

高木 地域の特性とこれまでの時間が、その地域が作り上げてきた“システム”だとすると、それを地球規模で見た時に、そのシステムは老朽化しているのか、刷新しているのか、どうでしょう？

齊藤 たとえば能登で作られる「はざ干し米」は、乾燥させると美味しく、高値でも売れます。晴れた日に干して乾燥させる文化ですが、実は大きな乾燥機を使って乾かすともっと美味しいものができます。大量にできるし、美味しくなるし、天日干しより苦労ありませんが、かなりの燃料を使わなくてはいけないので、地球環境で考えた時にはそれがいいと言にくいです。一概にすべてを否定できず、私の中の“答えのない問い”ですね。

鴨川 「本当はこっちの方がいいけど」と気持ちはありつつ、便利さや効率、美味しさを考えると取りにくい、というジレンマのある事象は身の回りに多くありますよね。教育でも、もっとこんな探求ができたらいけど時間が足りない、といった葛藤も多いと思います。

京都でおばんざい食堂「ひとつのおさら」を営む傍ら、大学でも教えています。エディブル・スクールヤード・ジャパン（以下、ESYJ）では、「すべての子どもたちに学校菜園を」と、菜園（ガーデン）を作り、教育の中心に食を置いています。東京の公立高校にモデル校となってもらい、アメリカから学んだカリキュラムを日本に合わせたかたちにして体系化を目指しています。なかなかハードルが高くて、学校の指導要領に詳しい先生がいらっしゃったらぜひアドバイスが欲しいです。

使われていない学校菜園が日本全国にあると聞いています。実際に関わった学校でも、校舎の裏に何も植えられていないスペースがあり、そこを再生しました。作るのは面倒でも、子どもたちがワクワクする学習のための菜園を設計しています。担任の先生とかなり密に授業内容を打合せして、逸脱しないカリキュラムを作り、子どもと先生が相互にやり取りをしながら、植え方を一緒に考えています。アウトドアクラスルーム（野外教室）のスペースでは、丸く座れるようにして、先生から声掛けがあってもみんなで顔を合わせて話し合ったり、考えたりできます。教室ではなかなか発言ができない子も、こういうところでは少し解放されて話ができます。

また、田んぼともいえない小さな場所で、毎年5年生が稲を育てています。おにぎりを作る工程を聞くと、みんな食べるのがコンビニのおにぎりだったりして、とても悲しくなります。ピーマンをりんごのようにかじる子もいます。公立の小学校では生で食べられなかったりもしますが、ガーデンでの試食を大切にしています。5,6年生が作った味噌をつけて、生で食べて。また、朝から出汁をとった日のエピソードがあります。出汁の香りが学校中に広がって、私たちは何となく「いい香りだね」で済ませていたところ、次の日に校長先生が「昨日はみんなすごくいい子だった」と。子どもたちがのぞきに来て、いい匂いだねとか、今日は誰先生が授業するの？とか、声をかけてくれていましたが、全校の子が問題ひとつなく聞いた時に、出汁の香りは大事なんだと気づきました。今の給食はセンターで作ったものを持ってくるので、出汁の香りがすることはないので。香りのように、五感・六感を使って楽しんだり、そういった経験ができなかったりするので、「言葉の姿を解体する」単元に合わせて、大豆の香りを解体しています。お花を使ったり、切り方を工夫したり、テーブルクロスを敷いたり、食卓が華やぐ経験をしてもらいます。食に向き合える空間をつくっています。

子どもたちも前のめりで、実践者の話を聞くのがものすごく好きです。鶏を使った、命の循環を学ぶ授業では、卵が毎日のように産まれます。生まれた卵は、お世話係の4年生が順番に持ち帰っていますが、殻が薄かったり、割れたりするのはなぜか、疑問を持ちました。餌のせいではないかと考え、専門家に聞いてみたり、餌の勉強をしたり、どんな対策ができるかみんなで話し合ったりします。卵を4年生全員がもらったら他の学年にあげよう、どの学年からあげようか、自分たちで決めました。そんな心が育つのです。

他にも堆肥のバスケットを作って、落ち葉を集めて鶏小屋の整備をしたり、学校林と畑をつなげて生物多様性も一緒に学んだり。保護者にも「エディブルママ」としてサポートに入ってもらっています。大人も面白いし、子どもも面白がる事ができています。

鴨川 食べ物を育てることが学習につながっていること、面白いなと思って聞いていました。これは教科にも接続してくるのでしょうか？

西村 総合学習でやっていることが多いですが、生活科や家庭科とも組んでいます。



フリーディスカッション

高木 佐藤さんが見せてくれた SDGs の年表を見て思ったことがあります。知っているか知らないかではなく、知ろうとするか、また得た知識とどう付き合っていくかが大事なんだと。『成長の限界』が出版された 1972 年はターニングポイントで、そこから ESD が 2015 年まで、そのなかで学んでいくことも、つなげていくこともたくさんあるはずですよ。新しいものが出てくると、「押し付けられているぞ」「知らないとだめだぞ」



「あいつは正解を知っているのか」なんて感じませんか？実際には過去からのスパイラル。でも、どうもそうなりにくいのがなぜか、考えています。

齊藤 「正解」は不確かなものとも言えるかなと思います。今日、常識だったものが明日には非常識になってしまうことも、今の情報化社会だとあります。正解だと思っていたことにまた新しい発見があって、それが 1 日のうちに情報が回ってしまうので、あっというまに不正解になってしまいます。

西村 同じくですが、やはり「これが正解だ」と思わないと次に進めないと思ってしまうのも事実ですね。ファイナルアンサーがないという話ではないかという気がしています。最後の答えを自分の中に決めないで、どんどん次の目標に向かって進んでいくことが、“正解がない”ということなのかなと思います。

高木 SDGs という言葉が出る前、ESD の時代からずっと活動していますが、「変わってきた」「変えられた」という実感があまりありません。2030 年も、実感がなのまま迎えるのかなと思ったことがありました。

佐藤 SDGs を外からやってきたものと捉えるのではなくて、自分たちが直面する問題だと考えていただきたいですね。この前のニューヨークの会議でも指摘されていました。自分たちの身近なものに関連づけつつも、いろんな背景がつながっていることを意識して、17 の目標に振り回されないことが大事です。本やカードゲームも出ています。アメリカの思考を持ってくることに抵抗のある方もいますが、日本のカリキュラムに合致していて、皆さんのもともとある地域の取組に、やりたいことや新しいアイデアを同期してみてもいいですね。

高木 JEEF も「日本型環境教育」の本を出していますが、やはり「日本型」が大事なのもかもしれませんね。自然学校のパンフレットには、自然体験はあらゆるつながりがあって、人、自然、地域が共生する暮らしへ、と書かれていることが多いです。まさにここが日本型を指すものなのかもしれません。

齊藤 人と自然と社会の合わさったものが自然型、という話がありました。私も里海教室をやっていて、これが日本型なんだと認識を持ち始めました。海外ではそういった仕組みを、故郷教育と呼んだり。

高木 日本型というものを世界とつなげる、世界を理解するのに必要なものだと考えられたらいいですね。“焼き鳥モデル”の串も、初めは私の串、それからみんなの串、最後は地球という串になったら、あらゆる問題を統合的に解決する動きになっていくのでは、なんて夢見ますがどうでしょうか。

全体会 3

全体会 3

ファシリテーター：東京工業大学／公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事 中野 民夫



全体会 3は、清里ミーティングで得たものを持ち帰るため、言葉にして落とし込む時間。スタッフも混じって、ゆっくり 3 日間をふりかえった。

会期中に生まれた替え歌の紹介から始まり、まずは一人でふりかえりシートを記入したあと、外へ出て、2 人組でシェアをした。気持ちのいい清里の空気の中、3 日間で印象に残っていることを共有した。続いてホールへ戻り、4 人組になった。「印象的だったこと」「学び、発見、気づき」「やりたくなかったこと」「もっと問い続けたいこと」をお題とした。

最後に全員で輪になり、参加者自身が「みんなにシェアしたい」と思ったことを共有し、全体会 3 を終了した。



参加者企画ワークショップ

参加者自身が企画・実施者となるワークショップを開催した。実施者でない参加者は自身の興味・目的に合わせて参加プログラムを選択し、各ワークショップ会場で参加者同士の活発な意見交換が行われた。

実施のあったワークショップは以下の通り。

◆90分ワークショップ・①（1日目午後）

01. 社員を全員ファシリテーターに
02. インタープリテーションをより効果的にする指標作成プロジェクト
03. 地球温暖化を逆転する100の方策ドローダウン紹介
04. 全く新しいアイデアで地球を救う本気スーパー脳嵐
05. 「静」のプログラムの可能性

◆150分ワークショップ（2日目午前）

06. スマホから考える世界・わたし・SDGs
07. ※実施者キャンセル
08. カードゲーム“新”エネルギー大臣になろう！
09. わたしたちの地域、みんなでどうする？～各地の事例から学び合おう！～
10. 野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議
11. 持続可能に海の資源を守るための取り組みを考える
12. 身体感覚の気づきから持続可能な社会について考えよう
13. 環境教育×中小企業！～パートナーシップで持続可能な事業をめざす～
14. エコロジカル・シンキング カードで発想しよう！
15. 自然観察の基本、環境教育の基礎をおさえよう

◆90分ワークショップ・②（2日目午後）

16. 見ることに頼りすぎているかもしれない私たちへ。
17. 古今東西！環境教育ミーティング！
18. ライブ&ダイアログ：自然の摂理を歌おう！
19. ゲノム編集食品について問い合う
20. 林業×チームビルディングの可能性は？

◆早朝ワークショップ（2日目朝）

01. 美しい玉虫の甲羅でアクセサリーを作ってみましょう。
02. 渡り鳥に出会い、季節や自然を感じよう！
03. 清里朝散歩♪
04. ヨーガと瞑想

◆当日募集ワークショップ（3日目午前）

01. UNCO ゲームを考える！
02. 全身で大地をつかみに行こう！
03. ビジターセンターの展示と運営を語り合う

04. 里山の楽しい保全とプログラム
05. 全体会ゲストと語る PKT
06. 持続可能を我らの手に
07. 正解がない時代の企業の社員教育・研修
08. 日中自然教育の未来を一緒につくろう！
09. **Beyond Food Barrier** で **SDGs** のその先へ
あるジェラテリアに来たエジプト人インターンと日本人スタッフの会話のその先

社員全員をファシリテーターに

実施者： 武石 泉、川瀬 雅子(日能研)、川嶋 直(日本環境教育フォーラム)

【概要】

今年の5月に発刊された「社員全員をファシリテーターに 学び合う会社に育てる研修設計 日能研ファシリテーション・トレーナー・トレーニング(以下、FTT)のすべて」を材料に、5年間かけて42人の社内トレーナーを養成した日能研の社員研修のプロセスを、参加者と共有した。後半は、組織内コミュニケーションについて困っていることなどを出し合い、その解決法を本で紹介しているファシリテーションの工具箱にヒントがないかを考えてみたり、グループでディスカッションするなどして各々が持ち帰った。

【実施内容】

1) GCP(グーチョキパー)アンケート、本の構成と社内研修紹介

簡単な3択アンケートからスタートした。その後、パワーポイントで社内研修の変遷や今回本で取り上げたFTT研修の研修設計図、具体的な内容などを紹介。研修の成果としてはさまざまあるが、成果のひとつが工具箱であるということもここでお伝えした。



2) 自己紹介&PKT(ぺちやくちやタイム)

4人グループで1人1分の自己紹介。その後は情報提供を聞いてのぺちやくちやタイム。質問したいことは紙に書いてもらった。

3) 質疑応答

グループから出た10程度の質問に答えた。ここで少し時間がかかったが、参加者が知りたい聞きたいことにもっと答えて行くことが必要だと判断し、時間を延長した。



4) 工具箱を展覧&ディスカッション

残り10分となったところで、部屋の前方に展示した工具箱80ほどを閲覧。自分が使えそうなものをピックアップし、グループでディスカッションした。時間がなくなってしまったため、充分話ができなかったという感想もあった。私たちも、このあと全体共有をしたかったが、質疑応答の時間を大事にした。



【感想】

武石: 予想通りではありましたが、90分があつという間に過ぎてしまった印象です。質疑には実際に現場でファシリテーションを使う上で実際的な質問や、そもそもこの研修をやる意義とは?という素朴な疑問まで多様な問いが出され、皆さんの興味関心の高さを感じました。ありがとうございました。

川瀬: 社内研修の内容に、多くの皆さんが真剣に耳を傾けてくださったことに感謝します。そこから派生して、ご自分の所属している組織はどうなんだろう?こんな技を使ってみたらもっとよくなるのではないかな?などと真剣に話し合っているのを見て、この本が何かを考えるきっかけをつくくれたのかなと思うと、うれしさを感じました。

川嶋: 「ファシリテーション」というキーワードに惹かれての参加者が多かった印象でした。ここ数年の清里ミーティングでは「環境教育」「SDGs」などのキーワードがその全体を貫いています。その学びの機会を支えている「ファシリテーション」のスキルや考え方についての参加者の興味が結構あることを確認しました。

【記録担当者】 川瀬雅子

インタープリテーションをより効果的にする指標作成プロジェクト

実施者： 村上 友和(株式会社自然教育研究センター)

【概要】

インタープリターが参加者に対して直接解説を行う「パーソナルプログラム」を、より効果的なものにするために作成された指標シートを使いやすく効果的なものにするを目的として行った。プログラムを体験し、指標シートを使ってプログラムをふりかえった。

【実施内容】

1) 導入

参加者の自己紹介に続き、指標シートの目的を紹介してワークショップを開始した。指標シートの根拠となったインタープリテーションの必要要素である、T(テーマがある)、O(整理されていて理解に努力がいらぬ)、R(参加者と関連性がある)、E(楽しさがある)について紹介した。

2) プログラム体験、指標シートへの記入

参加者に冬芽を題材とした室内でのプログラムを体験してもらった。プログラム終了後、指標シートの15の設問に答えてもらった。



3) 指標シートのふりかえり

指標を使った意見を書き出した。参加者からは、次のコメントをもらった。

「指標シートはプログラムの導入、展開、まとめに分けてあったが、初めて受けるプログラムの分割については、記入者が決めてよいのか」「必要な要素という言葉が出てきたが、何を意味するのかわからない」「数字で評価するのが難しい。「わかりやすい／わかりにくい」などの言葉がよいのでは」「考え方を共有するという視点では大いに活用できる」「指導者の力をあげていくには、一般参加者が書く想定をしたものがほしい」



【記録担当者】 村上 友和

地球温暖化を逆転する 100 の方策ドローダウン紹介

実施者：久保田 あや（ドローダウン ジャパン）

【概要】

地球温暖化を逆転する 100 の方策「ドローダウン」を紹介する。アメリカの環境活動家ポール・ホーケンを中心に発足したドローダウンプロジェクトは、2020 年～2050 年の 30 年間でどれくらいの効果を上げられるか見極めることが目的のもの。温室効果ガスの放出を抑える、および吸収する 100 の方策について、70 名の研究者が 22 か国より参加し、データ収集、研究、検証、シミュレーションし、プロジェクト・ドローダウンとして発表した。その内容について動画等を見ながら学び、私たちにどんなことができるのか、考えた。

【実施内容】

1) ようこそ・本日の内容と流れ

本日のワークショップのゴールを全体で共有した。

2) 自然とつながる時間

3) 自己紹介

参加者同士で 3 人組となり、自己紹介。ワークショップへの参加動機などを共有した。

4) 問 1「わたしにとって地球温暖化はどんなイメージか」

問いの答えをまず 2 人組でシェアした後、全体でも共有した。

5) ポール・ホーケンの紹介、動画

プロジェクト・ドローダウン発起人であるポール・ホーケンを紹介。ビジネスと環境の関係を変えるための活動を行っている。2 本の動画を見た後、感想や感じたことを 3 人組で話した後、全体でも共有した。

6) ドローダウン 100 の方策を知る

プロジェクト・ドローダウンの具体的な 100 の方策について紹介した。その中から参加者がそれぞれどれに興味を持ち、何をしたいと思ったかを 3 人組で話し合い、全体で共有した。



【まとめ】

「100 個も解決策があるなんて希望が見えました」、「授業でも紹介したいです」、「菜食をもっと広めます」など前向きな感想をいただいた。

【記録担当者】 久保田 あや

全く新しいアイデアで地球を救う本気スーパー脳嵐

実施者：菅山 亜美(NHK エンタープライズ)

【概要】

温暖化もプラスチック問題も、ずっとといわれ続けているのになかなか改善されません。今のやり方の延長線上に未来はないのではないか。本ワークショップでは、スーパー脳嵐(Brainstorming)の技法を使って、脳の瞬発力を集めまくり、アイデアに乗っかりあって、見たことない、聞いたことない、私たちの暮らしをなんとかするアイデアを生み出そうという試みに挑戦しました。

参加者全員で、脳みそをゆすりあいました。



「静」のプログラムの可能性

実施者：西尾 有香音、田村 のり子（公益財団法人キープ協会）

【概要】

日が沈み、神秘的な空気に包まれるこの時間の森を散策。「静」をテーマとしたプログラムを実際に体験し、どんなことを感じられるか、また気づけるか、#静#夜#癒しなどをキーワードに意見交換を行った。さらに、プログラムの可能性を広げるためのアイデアを出し合った。

【実施内容】

1) オープニング

実施者の自己紹介と合わせて、この時間の主旨を共有した。参加者と共に可能性を探りたいという想いが伝わった。



2) 実施者によるプログラム

空が夕焼けから満天の星空へ変化する中での実施となった。終盤では美しい木のシルエットや遠くのシカの恋鳴きに包まれながら、森に寝そべった。実施者の声掛けで五感が開き、「静」を様々な形で楽しんだ。



3) 体験をふりかえる

体験を通して感じたことを率直に発表し合った。多くでたキーワードは、「自分が自然の一部である事を思い出した」「呼吸が落ち着いた」「無音の中にも何かある」などであった。



4) 体験から可能性をディスカッション

振り返りから「静」の活かし方のアイデアを共有した。公園や教室、会議の合間など日常の中に取り入れる案や、自然や自分と向き合う空間づくりに使う案などがでた。



【まとめ】

夜の自然はとて「静」か実際は何も語らないが、それは「無」ではなく、「無限」の可能性を感じさせるものであった。「静」を活かすことで、心を動かしたり、また落ち着かせたりすることもできれば、自然の尊さや自然との一体感を感じることもできる。また、これからは、今回出たアイデアを異なる場や時間、参加者に対して応用できるように、さらに「静」のプログラムの可能性を深めていけると良い。

【記録担当者】西尾 有香音

スマホから考える世界・わたし・SDGs

実施者：中村 絵乃、岩岡 由季子(特定非営利活動法人 開発教育協会(DEAR))

【概要】

私たちの生活に身近なスマートフォン(スマホ)をテーマに、スマホの原料となる鉱石の採掘現場における紛争鉱物問題や労働問題、人権問題、環境問題について考えるワークショップを実施した。具体的には、クイズを通してスマホの製造工程や世界や日本での生産・利用状況を知り、さらに映像資料を通してアフリカのコンゴ民主共和国(コンゴ)の採掘現場で起きている様々な問題について理解を深め、参加者の間でディスカッションを行った。

※使用教材は『スマホから考える世界・わたし・SDGs』(2018年、開発教育協会)。 <http://www.dear.or.jp/books/book01/770/>

【実施内容】

1) アイスブレイク(部屋の四隅)

今持っているスマホの台数や、自分にとってスマホは必需品か、という質問を通じて、参加者のスマホの所持状況や使用方法についてインタビューをしていった。

2) スマホクイズ・スマホが手元に届くまで(カード並び替え)

スマホが最初に登場した国やサービス契約数などについて、クイズを実施した。世界の携帯電話・スマホのサービス契約数が79億件という事実には、その多さに驚きの声があがった。



3) 紛争鉱物とスマホについて考える

コンゴの紛争鉱物をめぐる問題について、映像「スマホの真実」(制作:PARC)を視聴して理解を深めたうえで、私たちに何ができるかなどについてグループごとにディスカッションを行った。



【まとめ】 スマホを持っていない中学生が参加者の半数近くを占めていたこともあり、ワークショップの冒頭ではスマホが生活必需品と考える人たちと、昔は無かったから必需品ではないと考える人たちに分かれて、様々な意見が交わされた。後半のディスカッションでは、コンゴの鉱物を取り巻く紛争や貧困、環境破壊、経済問題が複雑に絡み合っており、さらにコンゴ一国内だけではなく、世界(日本)の消費者にも関係していることを理解し、ディスカッションを行った。限られた時間の中で、私たちに何ができるかを具体的に考えていくことは難しかった一方で、複雑な問題に対して様々な視点や立場から考えることの大切さや、経済(開発)と環境の両立の難しさ、消費者の責任の大きさなどに気づいたといった感想が寄せられ、各々の学びや参加者同士の学びあいが見受けられた。

【記録担当者】 岩岡 由季子

カードゲーム “新” エネルギー大臣になろう！

実施者：古田 ゆかり(サイエンスカクテル)、小林 庸一(J-POWER 電源開発株式会社)

【概要】

国に見立てたグループに分かれ、参加者自身がエネルギー大臣となって自国内に発電所を建設し、自らの政策をどれだけ実現することができたかを競い合うゲームを体験するワークショップ。国が必要とする発電量を満たすよう 11 種類のカードから、どの電源を選択するか国内での対話を通じて決定する。それぞれの電源の特性と、世界の出来事や社会情勢が発電所に及ぼす影響等を理解し、エネルギーバランスをとることにジレンマを感じてもらいつつ、コミュニケーションの大切さを体験してもらった。

【実施内容】

1) 自己紹介とアイスブレイク

3人ずつ3つの国に分かれ、グループ内の結束力を強めるためのミニゲーム“心をひとつに！”でスタート。お題「オリンピックの花形スポーツは？」への答えを一斉に声に出す。なかなか揃わずとも和気あいあいとした雰囲気に。

2) ゲームの実施

くじ引きで決まった自国の特徴（先進国、産油国等）を踏まえ、電気料金・稼働率・自給率・環境負荷の中から自国の優先政策を決めた上で、じっくり話し合いながらどの発電所をどれだけ建てるか選択する。ゲーム中は各グループとも活発な意見交換が行われており、iPadを使いながら数値を確かめつつ、各々が積極的に検討する姿が見られた。途中でアクシデント・カードを引くことでイベントが発生するが、それに備えてのリスクヘッジや情勢変化への想定にかかる会話も盛り上がっていた。



3) 解説

様々な公的データから、世界と日本のエネルギー情勢について読み解くことで歴史や現実社会を知ってもらうための時間（サイエンスカクテルによるプレゼン）。ゲームでありながらもリアルに近い体験をしたことで実情への関心が高まり、また、対話を楽しみながらゲームをしたことから、学びへの意欲が喚起できた。



【まとめ】ワークショップ実施後の気づきを共有した。以下に意見、感想を列挙する。

- ・気軽にエネルギーミックスを学ぶことができた。バランスが重要だと思った。
 - ・エネルギーに対する自分なりの考え方を作るきっかけになった。
 - ・すべての条件を満たすエネルギーはないのではないかと気付いた。
 - ・対話だけでなく、合意形成がゲームに組み込まれている点が良い。
 - ・情緒やイメージだけではなく、きちんと数字で考え議論する点が良い。
- なお、アンケート結果からも満足度の高さは伺えた。



【記録担当者】小林 庸一

わたしたちの地域、みんなでどうする？～各地の事例から学び合おう！～

実施者：杉澤 莉子、今永 正文(ホールアース自然学校)

【概要】

少子高齢化や過疎化に伴い、様々な問題が取り巻く日本の「地域」。自然学校業界全体としても、より一層の社会へのインパクトを求められることが予測される。本ワークショップではホールアース自然学校と各地域との連携事例を紹介。その後、参加者で小グループに分かれ、「どのようにして住民のニーズを拾っているのか」「どんなアクションを各地で行っているか」などを話し合った。それを全体で共有し、今後の地域づくりに関わる際の大きな方向性やポイントを整理した。

【実施内容】

1) 自己紹介

名前と所属団体に加えて、地域づくりで特に関心を寄せているところを紹介した。



2) 実施者によるプレゼンテーション

ホールアース自然学校の紹介と地域づくり支援・協働事例の概況説明があった。さらに、福島校のある湖南町や猪之頭・静岡市大川地区での事例も紹介された。



3) 参加者によるディスカッション①

3人ずつのグループに分かれて個々の地域づくりの事例を話し、互いの活動について知った。



4) 参加者によるディスカッション②

ディスカッション①の共有を踏まえ、地域づくりに関わる上で大切なポイントについて話し合い、全体で共有した。



【まとめ】

本ワークショップのメインであった「次に繋げる」ためのディスカッション(②)では、特に多くの意見が出された。なかでも最も多かったのが、「人との繋がり・信頼関係をつくること」だった。地域づくりに携わる人同士での交流により、今回の情報交換はとても有意義なものになったようだ。

【記録担当者】 中島 果歩

野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議

実施者：村上 友和(株式会社自然教育研究センター)

【概要】

2020年4月に開催される、野外フェスティバル「GO OUT JAMBOREE2020」で実施する自然体験コンテンツの検討を行った。大人対象と子ども対象それぞれのアイデアを検討し、共有した。

【実施内容】

1) 野外フェスティバルでの環境の関わる取り組み

現在日本で行われている野外フェスティバルでの環境に関する取り組みを共有。会場周辺の森林整備やソーラーパネルで発電した電気を使用したステージ等をホームページと合わせて紹介した。事例紹介として、野外フェス「GO OUT CAMP」、「GO OUT JAMBOREE」で行われてきた自然体験プログラムを動画と写真で紹介した。

2) 自然体験プログラムの検討

大人・子ども対象それぞれのコンテンツを実施するにあたり、実施場所の環境や時間、備品を確認した後、2組に分かれてグループごとにアイデアを出し合った。



3) ふりかえり

各グループで出たアイデアを全員で振り返った後、今回出たアイデアを実現する場として、GO OUT JAMBOREE2020 の開催時期とスタッフとしての参加方法を紹介し、参加を促した。



【記録担当者】 村上 友和

持続可能に海の資源を守るための取り組みを考える

実施者：道城 征央(道城フォトオフィス&エコ自然塾事務局/マイクロクリーンアップキャンペーン事務局)

【概要】

フォトジャーナリストであり水中カメラマンである実施者が撮影した写真と動画を使って、2つのテーマを考えた。ひとつ目は「商業捕鯨再開」について。2018年、日本はIWC(国際捕鯨委員会)を脱退して商業捕鯨を再開させた。2つ目は「クロマグロの問題」について。絶滅危惧種に指定されそうになったクロマグロ、その資源回復のためにどのような方法が取り入れられているのか。

【実施内容】

1) 自己紹介

和気あいあいとした雰囲気です。まずは参加者同士の自己紹介を行った。



2) 商業捕鯨再開を考える

食文化としての捕鯨や海外からの指摘、IWCの脱退などの日本の捕鯨を取り巻く現状を解説。そのうえであえて商業捕鯨再開の賛否を尋ねたところ、参加者は全員反対だった。



3) クロマグロの問題

持続可能にクロマグロを食べるため、養殖が行われている。畜養は最も環境負荷が高い漁であり、様々な問題が絡む中、サバにマグロを産ませる研究がされている。参加者のほとんどが賛成だった。



4) 日本人の自然観

「八百万の神」という言葉が存在するように古来より日本では自然と人と同位置にしている。自然への敬意、感謝の気持ちは文化にも表れている。写真は北品川の鯨塚(実施者撮影)。



【まとめ】写真や動画を見ながら、2つのテーマについて様々な議論がされた。ここでは断言できるような答えを出さず、対話した内容を継続的に考えていってほしい。

【記録担当者】道城 征央

身体感覚の気づきから持続可能な社会について考えよう

実施者： 増田 泰子(BeAct)

【概要】

呼吸力をキーコンセプトにした簡単なセルフケアワークを通して、日頃なかなか意識することのない自分の身体、呼吸、心と向きあうワークショップ。心身の健やかさや呼吸の大切さ。ビフォーアフターで実感できる目に見えるものと見えないものの気づきから皆さんと自分の身体を通して感じ、考える世界やこれからの社会について向き合った。

【実施内容】

1) 自己紹介とアイスブレイク

アイスブレイクもかねて2人組で自己紹介及び、体軸の安定を2人でチェック。



2) パワーポイント講義

現代人の身体の状況や高齢化などの社会の現状、呼吸についての仕組みや効能また、真の健やかさについての講義。何かをする Doing のまえの Being への気づきやその価値について解説した。



3) セルフケアワークの体験(動きで感じるマインドフルネス)

自分の今の呼吸を感じることからスタートし、呼吸機能を高めるための土台となる簡単なセルフケアワークを紹介した。「簡単、誰でもできる、気持ちいい」を大切に。



4) 共有の時間

気づき及び身体からの気づきから考える持続可能な社会について対話した。



【まとめ】 持続可能な社会をどう作り出していくか？頭で考えがちだが、まずはそれを作り出す人の心身の健やかさがあってこそ、これからの社会に対応する力となる。実際に今の社会でどう活用していくか、なかなか回答に至らなかったものの、これを機に参加者が今後どのように自身の身体と向き合い、身体から感じ得る知性を磨いていかれるか、ささやかな期待を持ちたい。

【記録担当者】 増田 泰子

環境教育×中小企業！～パートナーシップで持続可能な事業をめざす～

実施者：菊間 彰(一般社団法人をかしや)、平野 啓三(平野薬局、愛媛県中小企業家同友会)

【概要】

SDGs の普及とともに環境教育や SDGs に取り組む企業が増えている。しかし、積極的に取り組んでいるのは主に都会の大企業であり、地方の中小企業はまだ。取り組みたいと思っても、マンパワーもノウハウもないため、なかなかできないのが現状だ。一方、環境教育業界はノウハウはあるものの全般的に「稼ぐ」力が弱く、持続可能であるとは言えない。

本ワークショップでは、環境教育事業所と中小企業が連携して事業に取り組む愛媛県の事例をもとに、地域の雇用を支える中小企業と環境教育との連携を考えた。

【実施内容】

1) チェックイン

まずは車座になり、体を動かすワークを少し。
その後名前と所属、ひとことずつ言ってチェックイン。
のちにデートゲームでお互いを知り合う時間を設けた。



3) 自分たちにできることを考える

4人組くらいにわかれ、自分たちに何ができるか、どんな可能性があるかを話した。企業、行政、学生環境教育事業者など多様なセクターが揃っていたため話が弾んだ。



2) 愛媛県の事例紹介

中小企業である平野薬局の環境への取り組みと一般社団法人をかしやの事業、および二社がコラボした事業をスライドで紹介した。



4) クロージング

ふたたび車座になり、ワークショップでの気づき、学びを全体で共有。クリップボードを使いA4の紙に一言ずつ書き、全員でシェアした。



【まとめ】 環境教育と中小企業のコラボは、全国的にもそれほど多くはないため、参加者に大きなインパクトと可能性をもたらしたのではないかと。また参加者の属性が、企業、行政、環境教育事業者、学生などさまざまであったため、それぞれの立場からの意見を交換することができ、有意義な時間となった。

【記録担当者】 菊間彰

エコロジカル・シンキング カードで発想しよう！

実施者：奥宮 健太(BEANS BEE)

【概要】

「エコロジカル・シンキングカード」とは、生物の特徴や行動をカードにしたアイデア出しのツールである。ワークショップでは、このカードを使いアイデア出しを行った。デザイン思考の5つのステップ「共感」、「定義」、「発想」、「プロトタイプ」、「テスト」の考え方に基づき、今回は、そのうち「定義」、「発想」、「プロトタイプ」の3ステップを実施した。まず、参加者がアイデア出しするテーマを、ワークシートを記入して「定義」をし、次に、エコロジカル・シンキングカードを使った「発想」を行い、最後に、絵に描く形で「プロトタイプ」して、それぞれのアイデアをまとめた。

【実施内容】

1) 自己紹介とアイスブレイク

名前、今の気持ち、24時間以内にあつたいいこと、アイデア出しのテーマを、参加者がA4紙に書き、自己紹介した。その後、売店で販売している鉛筆をみて、よい点をあげるアイスブレイクを行った。そのあと、実施者が、生き物にヒントを得てできた商品例などをあげ、今回使用する「エコロジカル・シンキングカード」を紹介し、デザイン思考の5つのステップに基づき、ワークショップの流れを説明した。



2) テーマの定義

参加者がアイデア出しするテーマを、目的、それにより何を実現したいか、テーマのサイズ感、テーマの問い形などを検討し、ワークシートを埋める形でアイデア出しする「問い」を決めた。



3) アイデア発想

「問い」に対して、まず、自分で思いつくアイデアを、ひとりで紙に書き出した。それを、参加者同士でシェアして、良い点をみつける形で意見を伝えた。さらに、「エコロジカル・シンキングカード」を使って、アイデアを紙に書き出し、もう一度、参加者同士でシェアをした。



4) プロトタイプ

アイデア発想で書いたアイデアを、「自分のイメージを固める」、「協力者に説明できるようにする」という視点で絵にまとめた。絵が苦手な人は、用意されたポンチ絵の例を参考にしながら、それぞれ、自分のアイデアを絵に描いた。

【まとめ】 少人数だったこともあり、濃密に意見交換し、感想を述べあうことができていた。参加者から、「自然保護の観点から自分ではなかなか出せないような意見がでた」、「自分にはない発想を知ることができた」、「実際にアイデア出しをやってみて、何のためにアイデア出しをやるか、明確にすることが大切とわかった」、「ワークショップはみんなで協力してひとつのアイデアを考えたかった」などの声があった。今回のワークショップでは、参加者がまとめたアイデアを実現する、というよりは、このようなアイデア出しの手法を試してみる感覚が醸成できたことが成果といえるだろう。

【記録担当者】 奥宮 健太

自然観察の基本、環境教育の基礎をおさえよう

実施者：安西 英明(公益財団法人日本野鳥の会/JEEF 理事)

【概要】

持続可能な社会を考えるには、ヒトという動物種が生まれ、人類として繁栄する基盤となった持続可能な自然の仕組みや、それを支える生物多様性について知っておきたい。また、自然の素晴らしさだけでなく、自然の厳しさも知ることで、文明の有難さと危うさを感じられるような、人類の物質的欲求を抑えるベクトルに繋がる価値観も提示したい。

【実施内容】

1) 自然ふれあいセンターの室内で、まず、自己紹介で参加動機や希望を述べてもらい、時間軸と空間軸からさまざまな命の在り方やつながりを講義した後、野外に出た。



2) 自然観察会でのリスクマネジメントに触れ、参加者に安全管理係、時間管理係、フィールドマナー監督などの係を分担してもらった。



3) 室内に戻ってから、参加者の中野民夫さんにシェアタイムを設定してもらい、振り返りや感じたことを各自が話し合い、発表するという場を作ることができた。



4) 最後は地球の46億年という歴史の中で、いつ頃、どんな生物がどのように進化したかを、クイズ形式で考えてもらった。



【まとめ】最後のクイズはこの惑星の奇跡や、単細胞の生命から脊椎動物、哺乳類、サル目、ヒトに至るまでに思いをはせてもらい、自分という命と今この時のかけがえのなさを実感してもらうことが狙い。終了後、「子ども向けのネタも仕入れたい」という希望に応じて、鳥の羽に触る、水滴を落とすなどのプログラムも体験してもらった。

【記録担当者】 安西 英明

見ることに頼りすぎているかもしれない私たちへ。

実施者： 久野 真希子、Liu Lu、Hadil Elkhoully、Mariam Hakim(プレマ株式会社)

【概要】

9種類のジェラートを目隠ししながら食べ比べることで、見えないことも感じられる自分を発見する体験をした。

【実施内容】

1) 自己紹介とアイスブレイク

自己紹介と、見ることによる体験を4人1組で話し合った。



2) アイマスクをつけて食べてみる

冷たいものを感じる感覚から、普段目に頼りすぎていることを共有した。



3) ジェラートの食べ比べ

ジェラートを実際に食べて、感じた味を共有した。
これを9種類行い、味を当てた。



4) 全体での味の共有、答え合わせ

参加者からは、正解がほとんどでなかったため、味の判断も視覚に依存していることを体感した。



【まとめ】

サステナビリティのほとんどは、目の前に見えるように描かれているとは限りらない。「見えない繋がりを見える化する」努力はもちろん大切であるが、すべてを常に見える化することは、現実的に困難である。

また、見えているという思い込みは、もっと危険かもしれない。このようなことをジェラートの食べ比べによって体験した。

【記録担当者】 佐藤 優斗

古今東西！環境教育ミーティング！

実施者：高橋 朝美(関東地方環境パートナーシップオフィス(関東 EPO))、
勝家 伸男(九州地方環境パートナーシップオフィス(EPO 九州))

【概要】

清里ミーティングをきっかけに各地域で広まった地域版環境教育ミーティング。今回は、中でも続いている地域である、九州と関東のミーティングについて事例紹介をした。それをもとに「あなたにとっての環境教育とは」、「こんな環境教育ミーティングだったらいいな！」を話し合った。

【実施内容】

1) 趣旨説明:SDGs 時代の“環境教育”と“環境教育ミーティング”の価値と可能性

関東 EPO 高橋から、環境教育を取り巻く社会の状況の変化を、ESD、SDGs、地域循環共生圏などと合わせて整理。こうした社会の変化を踏まえて、環境教育ミーティングの価値と可能性を考える目的を伝えた。



2) 自己紹介

氏名/地方での環境教育ミーティングの参加経験/環境教育ミーティングに期待すること/今の気分 について、各グループで自己紹介を実施。

3) 事例紹介:九州環境教育ミーティング及び環境教育関東ミーティングの事例紹介

EPO 九州勝家、関東 EPO 高橋から、それぞれのミーティングについての経緯・特徴・続ける工夫を中心に紹介。九州の実行委員会の代表である浜本奈鼓氏からもコメントを頂戴した。

九州環境教育ミーティングの特徴： 24 回開催／フィールド重視型／実行委員固定／フィールドの希望に寄り添ってプログラム構築

環境教育関東ミーティングの特徴： 16 回開催／交流重視型／実行委員流動的／多角的な視点での分科会が魅力

4) ワークショップ:「あなたにとっての環境教育とは？」

事例の感想などを共有し、環境教育の価値に立ち返るワークショップを実施した。

あなたにとって“環境教育”とは？

「教育」という言葉に違和感！ 感じる、行動する。教えるものではなく、「学び」「学習」だよ。	企業が求める、一番の社会貢献 様々な技術、スキルがあっても環境課題は解決しない。本を感じるより、育てる人を！
「環境教育」は、「自然」と「人」、両方に効果がある。 自然：環境安全につながる知識 人：子どもたちの関心喚起	正直わからない！ 大切なことはわかるけど、効果や成果がはかりにくい。

5) クロージング:「こんな環境教育ミーティングだったら参加してみたい！」

今回のワークショップを通じて、どのような環境教育ミーティングであれば、参加者にとって参加しやすく、環境教育の価値を発揮できるものになるかを出し合った。

【まとめ】 地方で開催される環境教育ミーティングに参加したことのない参加者が多かった。最後のクロージングでのコメントを見ると、「ハードルがあまり高くないもの」「内容が明確なもの」「入門者とエキスパートを分ける」などの意見や、環境教育ミーティングのイメージについても「オタクの集まりでは？」などのコメントがあり、中盤で意見を出し合った

環境教育の価値を全体に伝えるために、潜在的参加者にも伝わりやすい企画構成をしていく必要性を感じた。そのためには、その地域において環境教育に携わり、人づくりの視点で企画のアイデアを出せる実行委員と、そのアイデアを形にし、狙いを明確にして広報等の運営を行う事務局と、2つの側面を持つ実行委員会の組織づくりが、地域において重要だと感じた。また、そうした人材が、この清里ミーティングに多く参加していると言える。

【記録担当者】 高橋 朝美

ライブ & ダイアログ：自然の摂理を歌おう！

実施者：中野 民夫(東京工業大学)

【概要】

新しいワークショップスタイルの探究として「ライブ & ダイアログ」を行なっている。57 歳からオリジナル曲が生まれ始め、昨年 CD を制作した中野民夫のオリジナルソングから、自然の営みについて歌った曲を中心に、一緒に歌い(ライブ)、また歌詞について参加者同士で話し合う(ダイアログ)、楽しい試み。今回は、清里ミーティングらしく、「自然」系の歌を中心に楽しんだ。

【実施内容】

1) 水の循環を歌い、チェックイン。

まずは屋久島の絵やスライドから、水が雲となり雨となり、

大地を潤し、川や滝を経て、海に静かに還る、という「水の循環」のイメージを共有し、「雨の森を歩こう」から歌い始めた。

また参加者同士チェックインで「雨の森歩いたことある？」など話して、顔合わせも。

2) 水の旅の終わりとし死生観の語り。

「水の循環」は「人のいのちの循環」にも重なってくる。

川の水が海に還る浜辺で生まれた「水の旅の終わり」を歌い、「私たちはどこから来てどこへ行くのか」という死生観について、対話した。



3) 自然の摂理を歌う。

京都の鴨川で生まれた「風が流れてゆく」や、ヨーガのマントラを元にした「自然の摂理」を歌い、米国ニューメキシコ州の山奥を女性の禅老師と歩きながら生まれた

「Coming Back to Our True Nature」へと、綺麗な風景の写真とともに展開。



4) 替え歌ワーク

最後は、「生きてるうちに精一杯頑張ろう。頑張り尽くせば一つに溶けて、楽になれるから」で始まる歌「生きてるうちに」を歌い、そこから全員が「生きてるうちに精一杯〇〇しよう」の〇〇を考える替え歌ワークに突入。皆戸惑いながらも、傑作がたくさん生まれた。

【まとめ】

「生きてるうちに精一杯〇〇しよう」の替え歌のいくつかは、清里ミーティング最終日の全体会 3 冒頭で披露された。音楽と出会いの楽しい場になった。

【記録担当者】 中野民夫

ゲノム編集食品について問い合わせ

実施者： 中野 陽子

【概要】

ゲノム編集食品が市場に流通することになった。ゲノム編集食品を選ぶ／選ばない、という権利が消費者にはあるはずだが、選ぶことができないのが現状。「汝とは、汝の食べたものそのものである」という諺どおり、量であれ質であれ、私たちに食べものを選ぶ権利はある。ゲノム編集食品について概要を簡単に説明した後、多くの視点を持つ趣旨で、各自が異なる関連資料を読み、疑問点について「問いを立てる」方法で進めた。

【実施内容】

1) 自己紹介、 2) 実施者によるプレゼンテーション、 3) 資料を読む、 4) 問いを立てる、 5) 問いの整理共有、 6) まとめ
ゲノム編集の利点、問題点など、まだ社会全体で十分に共有されていないため、イメージで語るが多くなりがち。そこで、初顔合わせの9名が異なった資料を読み、ゲノム編集への疑問を書き出し、共有していく作業を行った。



【まとめ】

「問い」を立てた後に、共有の仕方が不十分だったため、参加者からは進め方に対して、多々コメントをいただいた。そのことによって改善すべきポイントが明らかになった。

事後の感想には「自分にはない考え方や見方が得られた」とあり、ワークショップの後に、ボランティアスタッフの方々から興味深かったと声かけをいただき、今後、十分にプログラムを練ることで、多くの方に満足いくものにできて行くと手応えを感じた。

【報告者】 中野 陽子

林業×チームビルディングの可能性は？

実施者：新津 裕(岐阜県立森林文化アカデミー)

【概要】

近年ようやく日の目を見るようになってきた林業だが、それでもまだまだ知られていない仕事や視点が多くある。一般的なイメージの、木を伐る・木材を得るなどの作業ではなく、教育的あるいはチームビルディング的な要素から林業の道具や作業を見ると、もっと森林内での活動の幅が広がるのでは？そんな思いから、元きこりのアカデミー教員が【林業×チームビルディングの可能性は？】ワークショップを企画した。

【実施内容】

1) 体験の前に

林業に関心がある人、チームビルディングに関心がある人、参加の目的は様々。森で働く木こり達の知られざるナチュラルな視点を、体験を交えて身体と心を温めていく。



2) チーム分け

チーム分けは丸太のスライスを使って行った。よくある材料も仲間探しの素材としては最高のアイテム。観察する体験の導入としても使えそうだ。



3) 林業の必需品トビ!?を使ったアクティビティ

林業や材木を扱う人にとっては必需品でもある「トビ」という職人の道具を使って、丸太を運ぶゲームの実施。やってみる・相談・リトライの繰り返しでグループごとに丸太を運ぶタイムを競った。



4) ふりかえり

今回体験した内容を、更にチームビルディング要素を高めるためにはどうしたら良いのか？実際に体験してみてどうだったか、参加者と共にふりかえった。意見も多くいただき、次回以降は更に進化したアクティビティとして紹介できそうだ。



【まとめ】今回は中国からのゲストにも参加してもらい、体験としては外国の方にも楽しんでもらえるモノであると感じた。林業体験は多くの現場で行われているが、アクティビティとしては更に整えていくことが出来るジャンルでもある。作業ではなく、教育的視点の効果がより見えてくると、林業に対しての認識も更に変化してくるのではないだろうか。

【記録担当者】新津 裕

早朝ワークショップ（60分）

◆美しい玉虫の甲羅でアクセサリーを作ってみましょう。

実施者：小林 伊久子（バジリコ）

タマムシは、法隆寺宝物「玉虫厨子」に代表されるように、古くから装身具として使われてきた。時代が変わっても美しさを楽しみながら玉虫の魅力を知る。玉虫は内臓以外ほとんどの部位が使われ（頭、目、触覚、腹、甲羅）、参加者はピンセットと接着剤を使って真剣な表情でアクセサリー作りに集中した。参加者のほとんどが、玉虫を見たのは初めて。作業中にも自然と会話が生まれ、お互いに褒め合っていた。玉虫の甲羅の美しさに驚き、部位の繊細さを感じる事ができた。



◆渡り鳥に出会い、季節や自然を感じよう！

実施者：安西 英明（公益財団法人日本野鳥の会）

清泉寮から自然ふれあいセンター近くまで散策。双眼鏡を貸し出し、野鳥を見分ける“ものさし鳥”を紹介してから、それらと比べてこれから出会いたい冬鳥の姿や声の特徴、渡りを解説。また、持続可能な自然の仕組みとして、虫を主食とする小鳥たちが、この時期に木の実を食べることが植物の種子散布に貢献している解説を加えた。植物や虫では冬を耐える工夫、鳥との関係を考え、鳥ではツグミやカワラヒワ、ハシブトガラスなどを観察した。冬鳥のツグミは十数羽ほど見られた。野生の命は他の命の食物になるほうが多く、今日見られたツグミたちの中で無事冬を越せるもの、春にロシアに戻れるのはごく一部かも知れないが、必ず生きのびるものが出て子孫を残し、季節は巡っていくことだろう。



◆清里朝散歩♪

実施者：齋藤 琴音（公益財団法人キープ協会 実習生）

八ヶ岳ブルーの青空の下、朝日に包まれながらお散歩。川や野鳥の声に耳を傾けてみたり、ササで鶏を作ってみたりしながら、森を楽しんだ。おススメの八ヶ岳が美しく見える隠れスポットでは、お手製のササ茶でホッとひと息。参加者の顔がゆるみ、笑顔溢れる一時だった。



◆ヨーガと瞑想

実施者：中野 民夫（国立大学法人東京工業大学）

清里の清々しい朝をヨーガと瞑想で楽しんだ。朝日に向かって太陽拝礼から始め、無理なく身体を調えるハタヨガ、そして呼吸法を経て、静かに座った。自分自身とつながりマインドフルなひと時だった。

開始前はまだ眠そうだった参加者の表情は明るく、すっきりした様子に変化した。瞑想中は自分自身と向き合う時間。特に身体を休めることができたのではないだろうか。忙しい日々を送っている人が時々スポーツなど自分の好きなことをして心身を休めることも大事だ。



当日募集ワークショップ (90分)

◆ UNCO ゲームを考える！

実施者： 奥宮 健太 (BEANS BEE)

2017年の清里ミーティングで、環境学習を進める長崎のウンコロジスト・福菌恵子さんとの出会いから考案された「UNCO (Unidentified Natural Cycling Object: 未確認自然循環物体) ゲーム」の試作を体験し、意見交換を行った。他にも「どうぶつの里」「マザーアイランド」のカードゲームも体験。自然のつながり、動物同士の関係性などがカードゲームを通して学ぶことができる。UNCO カードゲームはまだ商品化されておらず、ワークショップのなかで改善点・改良点について話し合った。

【記録担当者】久保田 翼



◆ 全身で大地をつかみに行こう！

実施者： 増田 泰子 (BeAct)、西尾 有香音 (公益財団法人キープ協会)

セルフケアトレーナーと森のガイドの初コラボ。足裏力、吸収力、全身の感覚を高めて森を歩くと新しい自分に出会えるワークショップ。テーマは「身体感覚の気付きから考える持続可能な社会」。

簡単セルフケアワークから、身体機能や呼吸力を高め、人の大切な資源である身体と心、内側の気づきへ。「頑張らない」「他人と比べない」「呼吸を楽しむ」をルールとした。森の中を裸足で歩き、五感を促進させたあと、横になって20分ほどリラックス。森を見つめて呼吸を感じた。身体から感じる自分の中の自然と外の自然、フィットネスや環境教育に関わるひとの新たな価値観の創造、可能性に繋がった。持続可能な社会のベースは人であり身体が資源ということに気づかされた。

【記録担当者】喜來 大智



◆ ビジターセンターの展示と運営を語り合う

実施者： 半田 俊彦 (伊勢志摩国立公園管理事務所)、関根 健吾 (公益財団法人キープ協会)

八ヶ岳自然ふれあいセンターの展示やフィールドでの活動について、今後求められる施設像について語り合うワークショップ。まずは2~3人のグループに分かれてセンターの館内の見学を行った。このときは来館者の目線になり、「この展示はわかりやすい」「ここは目に触れにくいかもしれない」など意見を交わした。それから実施者による案内・解説をつけて、全員で改めて入口から展示を見て回る。

展示を見ての感想や意見、今後ビジターセンターの展示に活かせることなどを話し合った。

【記録担当者】中島 果歩



◆ 里山の楽しい保全とプログラム

実施者： 笹谷 康之（立命館大学）

里山を保全する人々、環境教育に参加する人々、棲んでいる動植物がともに幸せになる楽しいアクションのアイデアを出し合うワークショップ。保全活動をしたくても理解してもらえない、資源が活用できていないなど、実際に活動している参加者の悩みも共有された。

環境教育をどのように推進するのか、今ある課題をどう解決するのか、里山の保全はどのように進めていくのか。様々な意見が交わされた。今回出された課題を解決していくためにも、これからも議論をし、具体的な解決方法を見つけ実践しなければならない。

【記録担当者】 宮本 美彩紀



◆ 全体会ゲストと語る PKT

実施者： 齋藤 雅代（えんなか合同会社）、佐藤 真久（東京都市大学）、高木 幹夫（日能研）、西村 和代（一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン）

2日目の全体会登壇者による、言い足りないこと、聞き足りないこと、何でもアリで語り合うワークショップ。「花壇の活用×児童生徒への料理教室」「特に取り組んでいない人がSDGs バッジをつける理由」「発想の転換によってできる豊かな社会」など、複数のお題が自由に出されて議論された。話が深まるにつれ、日本の法律、社会で感じる不自由さ、など共通のキーワードも見えてきた。今後、豊かな生活を築き上げるにはどうすればよいか議論する時間となった。

【記録担当者】 佐藤 優斗



◆ 持続可能を我らの手に

実施者： 鈴木 悠太（旭川市旭山動物園）、白田 侑子（新渡戸文化アフタースクール）

持続可能な（ ）を本気で考え、なにかを生み出すアイデア会議。全員での自己紹介の後、円形になって座り「あなたの持続可能な（ ）は何？」をテーマに意見を出し合った。

また、しゃべるだけでは終わらないとして、「熱い思いを言語化すること」をゴールに定めた。話し合い中は実施者の二人が意見をメモ用紙に簡潔にまとめ、中心に置いた机に並べていった。

今後の環境問題や NPO・企業の在り方や持続可能性について話し合いが白熱し、現状を把握したうえで、これからどうしていくべきなのかというポジティブな意見が交わされた。

【記録担当者】 川島 優大



◆ 正解がない時代の企業の社員教育・研修

実施者：田中 咲子

個々で結果を出そうとしがちな現代の企業が、今後、生き残っていくためにはどうしたら良いか考えた。今回の議題は新卒・中途入社における研修制度。社会人と学生、職種等の違いを活かして考えを補い合うことで積極的な意見交換となった。

様々な職や経歴を持つ人々が交える意見はとても実りのあるものになった。今後の企業を取り巻く環境の変化に対応するために新人の教育は必須である。今年の清里ミーティングのテーマはいわゆる「教えない教育」に通ずるものがある。白熱した議論ののちにこれから社会に出る大学生へのメッセージとして今回出た意見を捉え、そして企業研修のありべき姿を確認してワークショップは終了となった。

【記録担当者】小柴 圭太



◆ 日中自然教育の未来を一緒につくろう！

実施者：陳 志強（中国自然教育ネットワーク）、
加藤 超大（公益社団法人日本環境教育フォーラム）、Fancy（日中市民社会ネットワーク）

中国自然教育ネットワークと日本環境教育フォーラム（JEEF）の提携協定が結ばれたことをきっかけに、日中の交流や事業提携を一層進めていきたい。それに関わりたい人、アイデアを持った人と語り合うワークショップ。

中国の自然教育の現状について中国自然教育ネットワークから共有があった後、グループに分かれてアイデアを出し合った。参加者それぞれに日中の関係へ想いを持っていることが感じ取られた。

【記録担当者】内田 奈七



◆ Beyond Food Barrier®で SDGs のその先へ

あるジェラテリアに来たエジプト人インターンと日本人スタッフの会話のその先

実施者： プレマ株式会社

プレマのジェラートをいただきながら、SDGs のその先を考えるワークショップ。エジプトのインターン生であるエルコーリ・エディールさんとエルハキーム・マリムさんから、エジプトでのワークショップや、プレマがお客様へ行っている「自分も SDGs の当事者である」と思ってもらう取組について紹介。

彼女たちは、自分が好きでやっていたことが実は SDGs につながっていたという発見をし、このことを“SDGs&Me”という言葉で説明した。

【記録担当者】内田 陽子



さんかくんプレゼンタイム

参加者がそれぞれ自分の活動について発表し、お互いの活動や目指す方向性について知り合う時間。発表者にはA1（縦）×1枚分のスペースが割り当てられ、そこへポスターやチラシ等を自由に貼り出し、参加者・参加団体の活動報告や話題提供、PRなどを発表した。

発表には170cm×70cmのダンボール3枚で三角柱をつくる「さんかくん」を使い、同時多発的にポスター発表を行った。予め用意したポスターを貼る、KP法で話をする等、発表者の発表スタイルも自由。時間は区切らず、発表者と聞き手が自由に動き回り、その場で活発な意見交換が行われていた。

また、事前申し込み分だけではなく、発表を行いたくなった人がその場で発表側に回れるよう、白紙の模造紙を貼っただけのスペースを用意したところ、そこで発表者にまわる参加者も見受けられた。



オプション

◆協賛企業ブース

清里ミーティングへご協賛いただいた企業様の紹介ブースを設置。



◆自由配布コーナー

参加者が自由にチラシやパンフレットを設置できるコーナーを設けた。



◆顔写真名簿

参加者が会いたい人を探せるよう、全参加者の顔写真を掲示。夜の情報交換会では、JEEF 理事が会いたい人を紹介してくれるコンシェルジュデスクを設けた。



◆リクルートコーナー

求人情報・求職情報を自由に貼り出せるコーナーを設置し、夜の情報交換会ではマッチングタイムを設けた。



◆フォーラムショップ

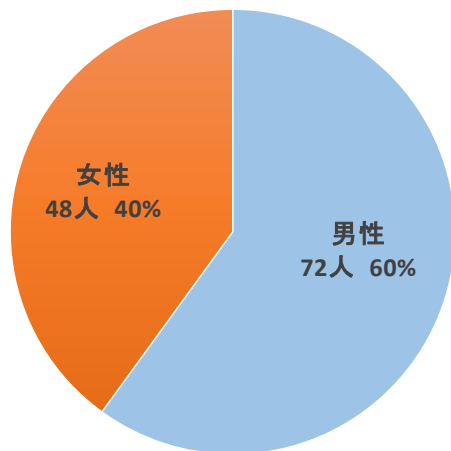
環境教育に関する教材・図書、グッズなどの販売が行われた。



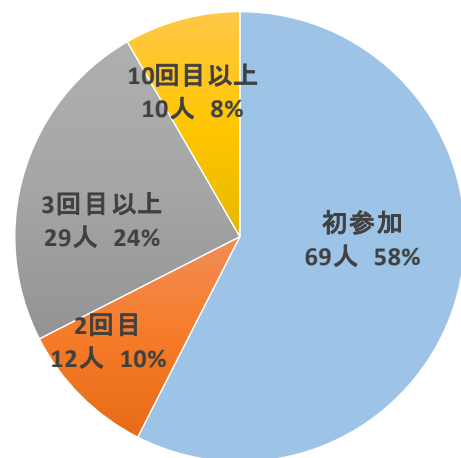
参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2019～

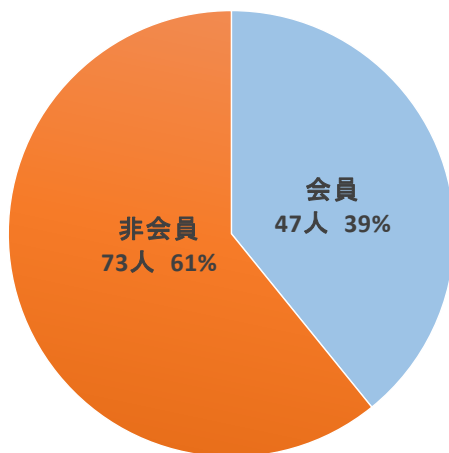
性別



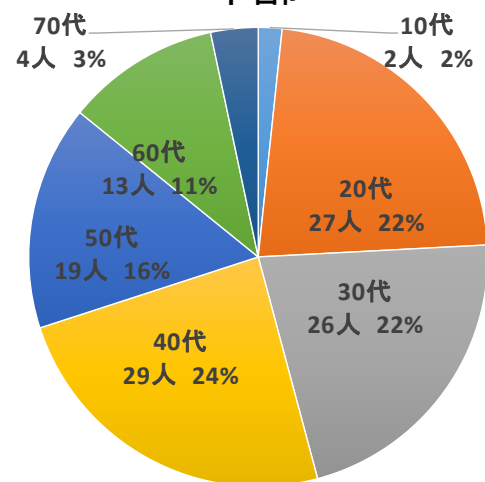
参加回数



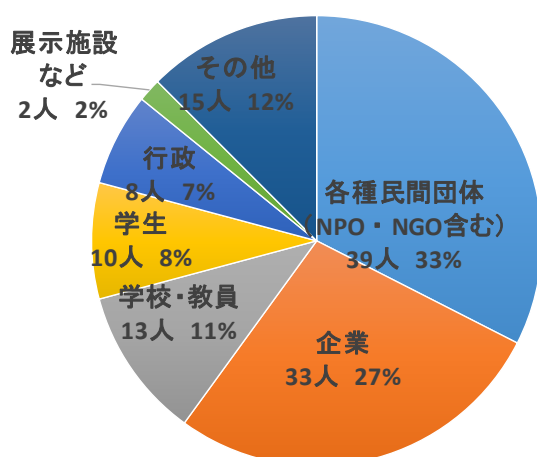
(公社)日本環境教育教育フォーラム 会員



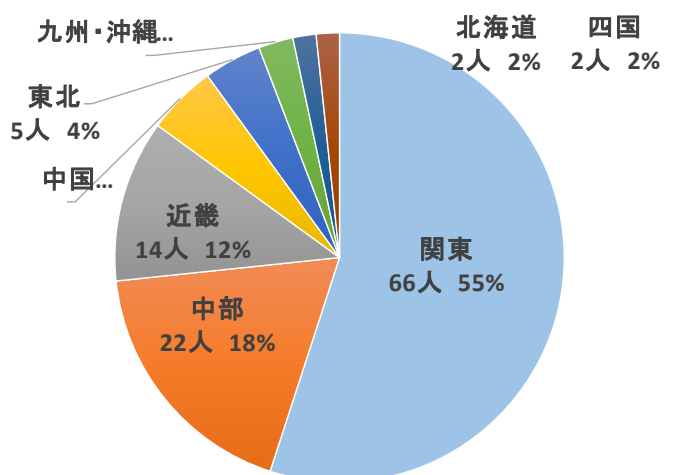
年齢



属性



地域



スタッフ・ボランティア

スタッフ名簿

川嶋 直	(公社) 日本環境教育フォーラム
加藤 超大	(公社) 日本環境教育フォーラム
伊地知 透	(公社) 日本環境教育フォーラム
嶋川 光	(公社) 日本環境教育フォーラム
柴原 みどり	(公社) 日本環境教育フォーラム
瀬尾 隆史	(公社) 日本環境教育フォーラム
垂水 恵美子	(公社) 日本環境教育フォーラム
山口 泰昌	(公社) 日本環境教育フォーラム
饗場 葉留果	(公財) キープ協会
大久保 哲	(公財) キープ協会
石川 昌稔	(公財) キープ協会
岡野 由美	(公財) キープ協会
小野 明子	(公財) キープ協会
川村 悦子	(公財) キープ協会
坂川 実基	(公財) キープ協会
齋藤 琴音	(公財) キープ協会
齋藤 園子	(公財) キープ協会
佐藤 陽介	(公財) キープ協会
関根 健吾	(公財) キープ協会
高木 恭子	(公財) キープ協会
田村 のり子	(公財) キープ協会
鳥屋尾 健	(公財) キープ協会
西尾 有香音	(公財) キープ協会
増田 直広	(公財) キープ協会
村井 孝一	(公財) キープ協会
柳川 真澄	(公財) キープ協会

ボランティアスタッフ名簿

(五十音順)

石永羽香	麻布大学生命環境科学部環境科学科
内田奈七	東京環境工科専門学校
内田陽子	立教大学社会学部現代文化学科
川島優大	立教大学社会学部現代文化学科
喜來大智	青森大学総合経営学部経営学科
久保田翼	麻布大学獣医学部動物応用科学科
小柴 圭太	青森大学総合経営学部経営学科
佐藤 優斗	東邦大学生命圏環境科学
中島果歩	麻布大学獣医学部動物応用科学科
古川 恵理	獨協大学国際教養学部言語文化学科
宮本美彩紀	青森大学社会学部



清里ミーティング 2019 を支えてくれたボランティアスタッフの皆さん、
ありがとうございました！

清里ミーティングこれまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について(考え方とその論理)
②自然観察の中に今後とこんでいきたいもの
③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
④施設運営とコーディネーターの在り方について
⑤自然観察の有料化について
⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子(小池しげんの子)

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会/(財)日本環境協会
- 後援：環境庁/山梨県
- 【分科会】
前半 ①学校と環境教育 後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育 ②施設と環境教育
③施設と環境教育 ③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育 ④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育 ⑤環境教育の目的と方法
⑥学校と環境教育
⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ(元ヨセミテ国立公園管理事務所長)

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会/(財)日本環境協会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
②若い世代に楽しいプログラムとは
③環境教育をうまく経営していくためには
④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
⑤環境教育で村おこしができるか
⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ(元マリン・ディスカバリーズ専務理事)

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会/(財)日本環境協会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
③プログラム ④人づくり
⑤施設 ⑥地域開発・村おこし
- ※この年4月より上記6つの研究部会が発足。
- ゲスト：ジョセフ・コーネル(ネイチャーゲーム考案者)

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：スティーブン・メドレー(ヨセミテ・アソシエーション会長)

- *1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足
- *1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
②New School of Conservationにおける環境教育
③ペンギンリザーブ活動報告
④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
⑤フィールドミュージアムごっこ
⑥環境教育国際セミナーに参加して
⑦成城学園における「散歩」遊び
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう! 開発教育シミュレーション
②エコロジーキャンプつまみぐいハイイク
③ネイチャーゲーム入門
④もしフィールドでけがをしたら
⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育
②地域に根ざした環境教育
③エコツーリズムの可能性とその問題点
④環境教育のプログラム教材開発
⑤指導者養成について
⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
③マインドクロッキー ④パートナーシップへの挑戦
⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ(ストーリーテラー)

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
③森の宝箱をつくらう ④地球救出作戦
⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育 ④ネイチャー
トレイル ⑤自然学校
⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー(ミドルベリー大学英語学・環境学教授)

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり ②行政・自然学校
③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
③環境教育を企画・プロデュースする
④ソフトクリーム姉ちゃんをねええ!
⑤未知なる可能性を求めて
⑥キープ・フォレスト・スクール®のプログラム体験
⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は?
⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算10回)

- 日時：1996年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：174人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①自然学校の「事業化」
②自然学校でのプログラム
③地域振興と環境教育
④環境保全活動がそのまま環境教育
⑤エコツーリズムの様々な可能性
⑥JEEFの法人化など今後の可能性
- 【ワークショップ】
①ネイチャーゲーム入門講座
②ネイチャーエクスペリアリング
③清里での川の環境教育を考える
④「子供であそぼう」についての御紹介
⑤元気がでる自然観察
⑥環境教育の本質を考える
⑦環境教育を企画・プロデュースする
⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
⑨自然をテーマにしたスライドショー
⑩自分への気づきとNGO
⑪清里インターネット通信社へようこそ
⑫森だくさんの自然体験
⑬まちを遊ぼう
⑭未知なる可能性を求めて
⑮エコビレッジを作ろう
⑯アクティビティの「バクリとアレンジャローカライズ」

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算11回)

- 日時：1997年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：170人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①環境教育の指導者養成
②環境教育の新しいプログラム開発
③環境教育とまちづくり
④環境教育の情報の発掘と提供
⑤企業や行政とどのように組むのか?
⑥新しい交流集会のスタイル
- 【WS】①ネイチャーゲーム入門講座
②自然と心・心とひとのコミュニケーション
③環境教育の服装計画を考える
④出たところ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
⑤環境教育を企画プロデュースする

- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディープエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリアングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

- ③地球と私の合作づくり「1枚の葉」
- ④見て、聴いて、感じて・・・朝の森でネイチャーゲーム
- ⑤早朝ジョギングワークショップ
- ⑥キモチときもちをつないだら

- スライドプレゼンテーション
- JEEF理事による3分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算12回)

- 日時：1998年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：176人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの
- 【ワークショップ】
 - ①環境教育個人商店を考える
 - ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
 - ③21世紀のインタープリテーションを求めて
 - ④おきらく やまんの部屋
 - ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
 - ⑥エコマネーのすすめ
 - ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
 - ⑧ネイチャーエクスポアリアング
 - ⑨エコスピリチュアルワークの試み
 - ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
 - ⑪これまでの50年とこれからの50年
 - ⑫川を設計してみよう
 - ⑬「おもい」を「かたち」はじめの一步
 - ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算13回)

- テーマ：「学ぶ心・育つ力」
- 日時：1999年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越える！
 - ⑧教育を考える
- 【早朝 WS】
 - ①カラスのきもち
 - ②朝のティータム
 - ③きもちとキモチをつないだら
 - ④五感で感じよう清里の自然
 - ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算14回)

- テーマ：「原点を見つめよう」
- 日時：2000年11月11日(土)～20日(月)
- 参加人数：171人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①野外での救急法を覚えよう
 - ②ネイチャーウォッチング in 清里
 - ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
 - ⑤竹を使ったものづくり
 - ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
 - ⑦自分という自然に出会う
 - ⑧Frog(カエル)
 - ⑨プロジェクト・アドベンチャー
- 【分科会】
 - ①自然体験活動における体験学習法
 - ②ゆったり楽しむ ノスタルジック
 - ③虫を知る・入門
 - ④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
 - ⑤学校ピオトープの可能性
 - ⑥五感を使って楽しみながら自然探検
 - ⑦環境教育とスピリチュアリティ
 - ⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
 - ⑨自然学校のPR活動を考える
 - ⑩Out of Treasure Boxes
 - ⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
 - ⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
 - ⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」
- 【早朝 WS】
 - ①野遊び手遊び発見隊
 - ②センス・オブ・ワンダーの体験

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算15回)

- 日時：2001年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：192人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／農林水産省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
 - ③秋の味覚を楽しもう！
 - ④「ほっ♪」となるとき火講座
 - ⑤身体感覚講座
 - ⑥The Bear(ひぐまの生き方、暮らし方)
 - ⑦プロジェクト・アドベンチャー
 - ⑧やまねミュージアムへ行こう
- 【分科会】
 - ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きものに関連するもの)を活用する」
 - ②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
 - ③博覧会を環境教育という視点から評価する
 - ④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
 - ⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
 - ⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
 - ⑦小さな子どもたちのための環境教育の「技」をさぐる
 - ⑧地域の昔話を中心にした環境教育
 - ⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
 - ⑩Environmental Education in English
 - ⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
 - ⑫テロ・戦争に関してわかちあう
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭GEMSの体験プログラム
 - ⑮自然学校で働くこと
 - ⑯センス・オブ・ワンダー
 - ⑰ネイチャーエクスポアリアングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
 - ⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

- 【早朝 WS】
 - ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ
 - ②早朝ジョギングワークショップ
 - スライドプレゼンテーション
 - 参加者による3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算16回)

- テーマ：「胎動」
- 日時：2002年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：182人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 環境教育ミニレクチャー
- ヨハネスブルグ・サミット報告
- 参加者による3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!!」
- 【ワークショップ】
 - ①地域通貨ってなんだろう？
 - ②折り紙を使った環境教育の試み(3)
 - ③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
 - ④環境問題、エコロジカルアートからの試み
 - ⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
 - ⑥体験主義を超えて・・・プロジェクト・ワイルドの世界
 - ⑦「自然の中で働く男性はオパチャン度が高い??」を証明したい!!
 - ⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
 - ⑨ひよこのキモチ
 - ⑩モアイは何を見たか
 - ⑪Environmental Education in English
 - ⑫持続可能な開発と環境教育
 - ⑬森の交響サイン計画づくり
 - ⑭サロンの語り場
- 【早朝 WS】
 - ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②清里ミニガイドツアーA
 - ③清里ミニガイドツアーB
 - ④モンゴル茶で朝を迎えよう
 - ⑤清里ミニガイドツアーC
- スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2003(通算17回)

- キーワード：持続可能な開発のための教育
- 日時：2003年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：208人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 【全体会】
 - ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
 - ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律

- ・持続可能な開発のための教育 (ESD)
- ・スライド&トーク ーオローニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ウラっていいとも
- ②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
- ③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
- ④総合学習への NPO 参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故?
- ⑤エコ・ネイションゲーム
- ⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
- ⑦科学するココロを育てよう!
- ⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
- ⑨野生生物教育の現状と課題
- ⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
- ⑪「持続可能な人」づくり
- ⑫開府 400 年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
- ⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
- ⑭子育てという環境
- ⑮地方発! 食農発信!
- ⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】

- ①センス・オブ・ワンダー
 - ②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース
 - ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2004(通算 18 回)

- キーワード:「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
- 日時: 2004 年 11 月 13 日(土)~15 日(月)
- 参加人数: 187 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県
- 【全体会】
- ・「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
 - ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコワリズムという生き方
 - ②科学と環境教育
 - ③地場産小麦でパンをつくらう!
 - ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
 - ⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」
~第 1 回清里「エコ商品コンテスト」~
 - ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
 - ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
 - ⑧自然学校の動きと人材養成
 - ⑨環境教育 in 国際協力 最前線!
 - ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
 - ⑪酵母を育てて、パンを作ろう!
- ~酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり~
- ⑫石器時代に接近! モノはこうして作る ~シエラカップ~
 - ⑬いのちを伝える自然体験
~自分流健康な生きかたを学ぶ~
 - ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
 - ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
 - ⑯「1 億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

- バーム油のはなし ~開発教育入門講座~

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
 - ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 公開理事対談

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2005(通算 19 回)

- キーワード:「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会づくりに具体的にどのよう役に立ってきたのか」
- 日時: 2005 年 11 月 19 日(土)~21 日(月)
- 参加人数: 221 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 基調講演、5 分間スピーチ、パネルディスカッション
- 【WS&体験 PRG】**
- ①環境教育基礎講座(午前の部)
 - ②自然学校って何だ?
 - ③学校教育と環境教育
 - ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
 - ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じよう
~ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら~
 - ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証 ~セルフガイドシートの評価軸を作ろう~
 - ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう!
~低学年向けの GEMS プログラムを通して~
 - ⑧森林療法
 - ⑨プロジェクト WE T 体験会(午前の部)
 - ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
 - ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
 - ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
 - ⑬CSR と環境教育
 - ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは……
 - ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法! ~過去からの環境の変化を迎える~
- ⑰プロジェクト WE T 体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育 見直そう! あなたのインタープリテーション
~持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために

- 【早朝 WS】**
- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②座禅&ヨガ
 - ③清里ミニガイドツアー

- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 活動報告

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2006(通算 20 回)

- 日時: 2006 年 11 月 18 日(土)~20 日(月)
- 参加人数: 224 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会「日本の環境教育 この 20 年を振り返る」基調講演
- 学長鼎談「大学と環境教育」

【WS&体験 PRG】

- ①自然学校を事業化する
~20 年間に自然学校は何を獲得したのか~
 - ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
 - ③あなたにとって食育ってなに?
 - ④環境教育基礎講座
 - ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
 - ⑥学びとコミュニケーション
~GEMS プログラムの体験を通して~
 - ⑦ESD の実践のポイントを探る
~みんなで話せばわかってくる!~
 - ⑧森林環境教育のすすめ ~木が好きになるプログラム~
 - ⑨50 分プレゼンテーション(午前の部)
 - ⑩企業と NPO との協働を考える戦略会議
 - ⑪環境教育と ESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
 - ⑫環境教育と地域づくり
 - ⑬環境教育仕事塾
 - ⑭行政との連携を考える
 - ⑮太鼓で太古に退行するぞ!
 - ⑯木から樹を知る方法 ~木材を IP にいかす~
 - ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくらう
 - ⑱50 分プレゼンテーション(午後の部)
 - ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方
 - ⑳感性? 科学? どっちのインタープリテーションショー
- 【早朝 WS】**
- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②環境質問 ~答えのない問題~
 - ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
 - ④清里ミニガイドツアー
 - ⑤清泉寮 朝さんぽ

- 環境ショート映像作品上映会
- 今後の戦略会議
- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2007(通算 21 回)

- 日時: 2007 年 11 月 17 日(土)~19 日(月)
- 参加人数: 230 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 省庁プレゼンテーション
- 全体会:「生物多様性」基調講演
- ・第 3 次生物多様性国家戦略が目指すもの
 - ・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
~自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法~
 - ②行政との協働を考える
 - ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ~GEMS とゴードンメソッド~
 - ④食育コミュニティをつくらう!
 - ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
 - ⑥関西発! これからは日本的でいいこう!!
 - ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
 - ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
 - ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
 - ⑩50 分プレゼンテーション
 - ⑪企業と環境 NPO との協働を進める戦略会議
 - ⑫ESD を広める人のための「ESD 入門講座」
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭生物多様性と環境教育について
 - ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
 - ⑯メディアと自然学校
 - ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
 - ⑱体験型展示物を評価しよう
 - ⑲エコワリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
 - ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
 - ㉑やってみよう!! 体感ツリークライミング⑩の世界
- 【早朝 WS】**
- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
 - ③清里ミニガイドツアー

- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時：2008年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：192人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会：「日本型環境教育の知恵 出版記念」～日本型環境教育とは～

【ワークショップ】

- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ～どんな共生があるのか～
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境 NPO カタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコすもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ～日本の自然観という視点～
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊ぶくす
- ⑰障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ～行政・企業・NPOの協働～

【早朝 WS】

- ①砂鉄から鉄を作ろう! 柿崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おぼあちゃんのお家ツアー
- ③清里の森で宝物発見
- ④ロシアから渡ってきた鳥と出会しましょう
- ⑤清里ミニガイドツアー

■環境教育プレゼンテーション

- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ：「生物多様性」～環境教育の役割～
- 日時：2009年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：193人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会

■全体会

- ・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGO から
- ・事例紹介「生物多様性 私はこう伝える」
- ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座
 - ②多様な生物の声を聴く～全生命の集いワークショップ～
 - ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
 - ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
 - ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
 - ⑥風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
 - ⑦パーマカルチャーと環境教育
 - ⑧幼児～小2に伝える生物多様性～生物多様性の形を探る～
 - ⑩ビジターセンターを運営側から考える方法
 - ⑪あなたにとって、生物多様性って何?
 - ⑫生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
 - ⑬人間界に多様性は確保されているか
 - ⑭日本の森林環境教育と Project Learning Tree
 - ⑮どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
 - ⑯風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
 - ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑱エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
 - ⑲事故防止～注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
 - ⑳トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ⑦川遊びを始めよう! ～川の安全管理トレーニング～ は、都合により中止

【早朝 WS】

- ①生物多様性を映像で感じよう ～いっしょに生きる道～
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おぼあちゃんのお家ツアー
- ③ゼロからの火おこし術

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ：「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時：2010年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会

■全体会

- ・基調講演「生物多様性条約第10回締約国会議の結果」
- ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
- ・提案「What is CEPA??」
- ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
- ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②日本の自然観から考える環境教育
- ③農的暮らしの学校
- ④自然感を耕す：人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥生物多様性条約の CEPA って何だ?
- ⑦企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3
- ⑩「サステナビリティ」の基本はこれだ! ※
- ⑪これだけは知っておきたい! 生物多様性の基礎知識 ※
- ⑫生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑬森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
- ⑭大学生のための食育プログラム
- ⑮命をいただく～ワトリと生きる～
- ⑯エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑰「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう!
- ⑱イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑲企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

【早朝 WS】

- ①バードコールハイク
- ②多様性を感じる観察会
- ③ゼロからの火おこし術
- ④朝飯前の手仕事
- ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
- ⑥生き方を学ぶ自然観察
- ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
- ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おぼあちゃんのお家ツアー
- ⑨みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2011(通算 25 回)

- テーマ：「これからの日本の復興に環境教育がどういった役割を果たすのか」
- 日時：2011年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：188人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／経済産業省／山梨県／日本環境教育学会

■全体会 1

- ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういった役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
- ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
- ④農的暮らしの自然学校
- ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
- ⑥里山応援ネットワークを作ろう! ワークショップ
- ⑦0から仕事を作る～体験からチームを作る～
- ⑧『ワールドカフェ～自分発! 未来をかえる価値観考～』
- ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
- ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
- ⑪ESD×CSR：サステナビリティ教育指針を体感! ※
- ⑫やったらできた! エネルギー系企業と弱小 NPO のコラボ
- ⑬環境と文化・歴史・科学 etc. の複合…「旧暦」入門
- ⑭自然感を耕す 自分と里地里山山水が元気になるワーク
- ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
- ⑯PLT, WILD, WET の日本の可能性を考えよう
- ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことから始めよう～
- ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～

※の印は主催者企画ワークショップ

【早朝 WS】

- ①ゼロから始める火おこし術
- ②森林療法のプログラム体験～樹林気功と運動療法
- ③冬鳥と出会って、いのちを感じる
- ④キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2012(通算 26 回)】

- テーマ：「アジアの一員として、日本が今できること ～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
- 日時：2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

- 全体会
 - ・「アジアの一員として、日本が今できること ～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
 - ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういった役割を果たすのか」

- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育入門講座
- ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
- ③実施無し
- ④プーさんの森をデザインしよう！
- ⑤考えよう！伝えよう！森の“いのち”の知恵と力
- ⑥食から考える価値と暮らし
- ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！
- ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
- ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
- ⑩「住み開き」を考えよう ～身近に環境教育の場をつくる～
- ⑪「都市と自然の融合～両方見て、初めて見える環境教育！～」
- ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
- ⑬地域に根ざすということについて PBEへの招待
- ⑭田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ
- ⑮バトニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方
- ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
- ⑰都市型環境教育 小学生向け茶外線プログラム体験
- ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
- ⑲理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像
- ⑳身近な環境の総合的“明察”…内なる“マイ厩”を作ろう！
- ㉑農がXを助け、Xが農を助ける～半農半NPOでいこう～
- ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
- ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう！
- ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

- 【早朝 WS】
- ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- ②みどりともだち！泥んこ遊び de 苦玉作り
- ③キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2013(通算 27 回)】

- 日時：2013年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：204人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

- 全体会
 - ・キーンノートスピーチ
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション
 - ・「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

- 【ワークショップ】
- ①自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～
- ②地域に根ざした環境教育 Place-Based-Education
- ③モミでご飯をたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり～
- ④宇宙船地球号体感インプリ：20世紀天文少年の誘い
- ⑤環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
- ⑥「原発事故のはなし3」デモとディスカッション
- ⑦質的データ分析(QDA)を体験してみよう
- ⑧企業とNGOの幸せな関係をながく続ける秘訣
- ⑨楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
- ⑩知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～
- ⑪日常の現場や暮らしに持ち帰る“運営と振り返り”
- ⑫持続可能な地域のための必要なくみを考えよう
- ⑬継承したい日本の自然観～自然体という生き方～
- ⑭事例から学ぶ ESD(持続発展教育)の基本と実践
- ⑮ゲームで生態系を学ぼう！
- ⑯ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術～
- ⑰パフォーマンス評価の世界の潮流
- ⑱15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり
- ⑲小学校で環境教育やりたい人 集まれ！
- ⑳伝える技術 KP 法(紙芝居プレゼンテーション法)

- 【早朝 WS】
- ①アイソン彗星いつ観るか…清里、澄んだ空…今でしょ！
- ②ロシアからの旅人に会おう
- ③清里トレラン

- 【特別企画】
- ・アクアマリンふくしま移動水族館
- 【自主企画】
- ・プレゼンテーションで世界を変える！～TEDの世界～
- ・野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？
- ・スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
- ・JEEF 理事バンド(バンド演奏)
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2014(通算 28 回)】

- テーマ：「ESDの10年後の環境教育」
- 日時：2014年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：186人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・キーンノートスピーチ
 - ・基調報告 テーマ【ESD ユネスコ世界会議を終えて】
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション【私とESD】

- 【ワークショップ】
- ①自然の中で遊ぶゲーム
- ②再び、地域に根ざした環境教育(PBE)について
- ③企業のESDのあり姿/あるべき姿を考えよう
- ④「協働」による里山再生の取り組み～○○×○○～
- ⑤エネルギー大臣になろう～ゲームで考える環境教育～
- ⑥ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術
- ⑦楽器を使ってプレゼンテーションしよう
- ⑧語ろう！考えよう！「企業のESD宣言」
- ⑨電子絵本を活用したESDプログラムを考える
- ⑩国連の新目標(SDGs)は環境教育普及につながる？
- ⑪体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ
- ⑫“自然学校と林業”環境教育は暮らしの生業に直結せよ！
- ⑬イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ
- ⑭清泉寮で自然音楽野外フェスティバルをつくる
- ⑮教育と刃物～ナイフを使う喜びを子どもたちに！
- ⑯シニア自然大学を作ろう
- ⑰自己肯定感を育むESD～これからの学びへの提案～
- ⑱GEMSの新しい使い方～森の中で 図書館の片隅で～
- ⑲KP法(紙芝居プレゼン法)の工夫共有ワークショップ
- ⑳小学校で環境教育をやろう！Part II

- 【早朝 WS】
- ①朝の楽しい修行：ヨガと勤行
- ②環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②
- ③エンカウンターグループ「今ここ」
- ④清里朝散歩
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2015(通算 29 回)】

- テーマ：「地域をつくる環境教育」
- 日時：2015年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：174人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 特別協力：環境省グッドライフアワード
- 全体会
 - ・キーンノートスピーチ「農的生活学校の学び方」
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション「地域をつなぐ環境教育」
 - ・「世代を超えて一緒に○○おう！」

- 【ワークショップ】
- ①広範囲に拡散した外来種の市民による調査と駆除対策
- ②獣害問題は、環境教育の対象になるのか。
- ③エネルギー大臣になろう！～ゲームで考える環境教育～
- ④ご当地 GEMS～地域に根ざしたアクティブ・ラーニング～
- ⑤自然学校の30年を振り返りこれからの20年を考える
- ⑥環境教育の基礎…自然とは？命とは？
- ⑦「PBE：地域に根ざした学び」を考える
- ⑧「若者が地域で生きる・暮らす」を考える3時間
- ⑨里山ってなんだらう～その意味、価値を考える～
- ⑩野生生物と共生する環境地域づくりの進め方
- ⑪持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方
- ⑫サステイナブル・ツーリズム国際基準を自然学校に！
- ⑬体感、出航！宇宙船地球丸。「天文は苦手」吹っ飛ばせ
- ⑭探そう磨こう！環境教育の魅力伝えるコトバ
- ⑮野外フェスに環境教育を広げる『NATCU FES』
- ⑯地域が蘇る“森林資源を循環させる経済”を考える
- ⑰廃校利用の自然学校の経営
- ⑱ビギナーのための自然体験型環境教育プログラム

- 【早朝 WS】
- ①朝の楽しい修行：ヨガと瞑想と歌
- ②手づくりのもみ穀コンロ、ペール缶めくくの実演！
- ③ロシアからの旅人と再会しよう～冬鳥との出会いを求めて～
- ④清里朝散歩
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2016(通算 30 回)】

- テーマ：「環境教育の未来を考える！あなたの次の一歩は？」
- 日時：2016年11月5日(土)～7日(月)
- 参加人数：196人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・スライドショー「これまでの環境教育をふりかえる」
 - ・パネルディスカッション「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」

・全員参加型ディスカッション

【ワークショップ】

- ①持続可能な社会づくり、企業の役割とは
- ②持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」
- ③『エディブル・スクールヤード』をはじめよう！
- ④環境教育業界×私たち、若手の関わり方
- ⑤祝 30 周年☆清里ミーティングにまつわるコピーを作る
- ⑥自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て
- ⑦エネルギー大臣になろうワークショップ
- ⑧清里ミーティング「30+30」
- ⑨森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵
- ⑩“環境”＝“地球”を感じてみよう！天文のイロハ for 環境教育
- ⑪CEPA って何の略？地域をつくる湿地教育を考える
- ⑫森が薫る燻製づくり
- ⑬一流を学ぶ・・・第一印象と名刺交換
- ⑭「水の足跡」ースペース・ウォークを使ってー
- ⑮環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう
- ⑯海の森からの贈り物～海藻おしぼ～
- ⑰告知・広報に活かす”伝わる”、”伝える”文章講座
- ⑱環境教育と家族
- ⑲アクティビティを再生する
- ⑳野外での事故に備えよう！「野外・災害救急法」の体験
- ㉑ いま「公害教育」を考える
- ㉒ 「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！
- ㉓ 「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会
- ㉔ SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ
- ㉕ 銀粘土で作る リーフモチーフの純銀アクセサリー
- ㉖ 幻想は捨てよう！NPO と行政のミゾを埋める 80 分
- ㉗ 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり
- ㉘ マジックで環境教育に活用する
- ㉙ 抜けよう！特定外来生物駆除活動の輪！
- ㉚ 持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方 2

【早朝ワークショップ】

- ① ヨーガと瞑想
- ② 甲虫の玉虫でアクセサリーを制作してみよう
- ③ 冬鳥と出会い、地球を感じよう
- ④ 清里朝散歩

■10分プレゼンテーション

■ポスターセッション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2017(通算 31 回)】

■テーマ：「組織・活動を変革する 17 の視点 ～SDGs でつくる私のアクション～」

■日時：2017 年 11 月 18 日(土)～20 日(月)

■参加人数：137 人

■主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム

■現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、日本環境教育学会、持続可能な開発のための教育推進会議

■全体会

- ・パネルディスカッション「SDGs に向けて教育は何ができるか」
- ・自分×SDGs で次のアクションを考える
- ・全員参加型ディスカッション～SDGs でつくる私のアクション～

■ワークショップ

【対話型ワークショップ】

- ① フライング・ワイルドの体験と SDGs との繋がり
- ② SDGs ×わたし
- ③ 協同学習の手法で環境教育をスキルアップしよう！
- ④ 環境思想を考える
- ⑤ 生きものの魅力で心を動かしたい
- ⑥ 森林療法×環境教育～癒しが持つ SDGs への可能性
- ⑦ つなげよう！自然体験型エコツアーと SDGs
- ⑧ CSR プログラム事例で学ぶ社会的インパクト評価
- ⑨ パートナーシップでつくる「キョサト」SDGs 企画
- ⑩ 環境教育研究&実践から考える SDGs

【体験型 (E)・フレッシュパーソンズ (F) ワークショップ】

- ⑪ 持続可能な「ミライ」をつくる人材育成の在り方：F
- ⑫ 森林療法～調和する自己の持続可能性：F
- ⑬ 中止：野外活動を 120%楽しくする図鑑の読み方・使い方：F
- ⑭ 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり：E
- ⑮ KP 法で SDGs を整理してみよう：E
- ⑯ 17 の SDGs で柔軟な頭を作るゲームを：E
- ⑰ アナログゲームで環境を学ぼう！：E
- ⑱ 「教える」より「学びあう場」を創ろう！：E
- ⑲ 中止：自然を使った深く自分と繋がる体験ワークショップ：F
- ⑳ 「うんこ」から自然を見る ～教材化の面白さと可能性：F
- ㉑ 中止：環境ポータルサイト「BLUE SHIP」の活用方法：F
- ㉒ 自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て：E
- ㉓ 既存のプログラムを SDGs ナイズ大作戦！GEMS 編：E
- ㉔ SDGs と森里川海、そしてライフスタイル：E
- ㉕ 目からウロコ、環境教育のためのミニマム天文基礎講座：E
- ㉖ 公害と SDGs JEEF・あおぞら財団の協働 FW：E
- ㉗ 一体感を生み出す魔法の技術！アイズブレイク三連発♪：E
- ㉘ 音楽フェス×環境教育@清里 超実践体感ワークショップ

【早朝ワークショップ】

- ① 森林療法プログラム体験～樹林気功とグラウンディング
- ② ヨーガと瞑想
- ③ 甲虫の玉虫でアクセサリーを制作してみよう
- ④ マインドフルな自然体験
- ⑤ 冬鳥と出会い、地球を感じよう

■ポスターセッション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2018(通算 32 回)】

■テーマ：「ESD + SDGs ～ 未来を変える教育を考える」

■日時：2018 年 11 月 16 日(金)～18 日(日)

■参加人数：146 人

■主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム

■現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、ESD 活動支援センター、持続可能な開発のための教育推進会議、日本環境教育学会

■全体会

- ・SDGs がもたらす共創の可能性
- ・パートナーシップで未来を変える！
- ・アイデアは地球を変える

■ワークショップ

【体験型ワークショップ・1】

- ① SDGs に果たす ESD の役割
- ② 自然観察で知る生物多様性、命のあり方、人という生物
- ③ 学生版清里ミーティング実施に向けた作戦会議
- ④ 棚田米を土鍋で炊いて、味わい、お米の魅力を探る
- ⑤ JOLA ～アウトドアで「未来のための人づくり」～

【対話型ワークショップ】

- ⑥ SDGs for School 未来の教育デザイン
- ⑦ エコヴィレッジ、災害に強いオフグリッドの居場所作り
- ⑧ 研修「設計」のススメ
- ⑨ 公害の経験から考える SDGs 達成に向けた課題
- ⑩ 災害支援と自然学校の役割
- ⑪ 美しい棚田を未来につなぐ 11 年の環境教育の実践
- ⑫ ESD による地域創生の可能性
- ⑬ エコ・自然塾
- ⑭ 野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議

【体験型ワークショップ・2】

- ⑮ フルスイングの発酵ワークショップ
- ⑯ 読本「森里川海大好き！」を活かした環境教育へ
- ⑰ 森カフェ GEMS マタギさんと算数・自然の恵み山御膳
- ⑱ 歌の力、体感ワークショップ
- ⑲ UNCO ゲーム開発のためのβ版体験ワークショップ
- ⑳ 教員向けエコ×エネ体験ツアーの手応えと可能性
- ㉑ 森で元気に！キープの「森林療法」ちょこっと体験☆
- ㉒ ハラオチ納得！ジオガシキッチン教室
- ㉓ 「地域を活かした教育力」
- ㉔ 「九州・沖縄で暮らし続ける！」地域に根ざす SDGs

【早朝ワークショップ】

- ① ロシアからの旅人と再会しよう
- ② ヨーガと瞑想
- ③ 山珊瑚で根付を作ってみましょう
- ④ 清里朝散歩

■ポスターセッション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

清里ミーティング 2019 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF)

〒116-0013

東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 1階

TEL : 03-5834-2897 FAX : 03-5834-2898

URL : <http://www.jeef.or.jp/>